

其像前には。花環山を築き。國旗礎を掩ひ。女像は服を去り喪を出て。嫣然笑を含みて。錦衣故山に歸臥するに似たり。

九日。天朗に氣暖に。風日清美。殊に小春の佳候たり。午後四時。米國外征軍總司令官パーシング大將來りて台安を候ふ。親王迎へて。贈るに旭日桐花大綬章を以てし。其豐勳を頌したまふ。

薄暮余井上侯と。出て、街頭の一割烹店に入りて晚餐す。本店の羞膳は。味甘美なるを以て巴里に名あり。英、佛、白、米、伊、塞、葡諸國の武官等來餐する者多く。交ふるに佳人嬌女姣姬麗媛を以てし。滿堂燦爛。艷艷の花を盛るか如し。余等白を擧げて。將に休戰を祝せんとす。會膳幸來り諗けて曰く。獨帝竟に退位せりと。室中歡聲俄に揚る。

十時。親王隨員を從へ上途し。白國に赴きたまふ。コンノート殿下

一三三  
同伴したまひ。シンクレイヤ大尉之に扈し。安達駐白特命全權公使蜂一、永井佛國大使館附陸軍武官親王に扈從す。

### 白國王行宮

十日晴。夙に興きて車窓を開けは。汽車は方に徐徐として。イーハの戰場を過く。既往五年の間。英獨兩軍。一進一退。一前一卻。數此に鏖戦し。樹林燔け。枯木立ち。礮痕。地を決き土を覆し。滿目蕭條岑寂たり。

聞く數月來。英軍攻勢を取りて前進し。横に此彈痕地帯を過く。地帯曠漠。其幅狭き處。猶ほ七哩あり。而して道路圯壞し。泥濘險滑。車軸を没し。糧餉繼かず。英軍飛行機數百を以て之を運搬し。纒に懸軍の前鋒に給せりと。輓近戰鬥武器の天物を崩壞するの甚しき。又科學工業の作戰に資助するの大なる。今此地を歴て。思ひ半に過くる者あり。

此間醜陋の土丁。諸所に屯集して羣を爲し。遺棄の武器を拮拾し。

道路を繕完し。以て戰場を淨掃するあり。近つき觀れば。皆支那苦力なり。蓋し佛國壯丁。擧げて軍に従ひ戰に莅む。故に此種工役は。支那人を驅使するに至れるなり。

既にして右方に岡陵を望む。標高六十の高地なり。此地千九百十六年五月十八日。英軍爆發して之を攻略し。爲めに反りて獨軍の憤恨を激し。始めて毒瓦斯攻撃の禍を誘致せし所にして。亦戰跡の史乘に特書すべき者とす。

汽車此を過き。戰墟の一小驛に停る。傍ありノ、マンズ、ランドと曰ふ。ノ、マンズ、ランドとは。人跡未到地の謂なり。蓋し英獨兩軍。塹を浚りし濠を深うし。以て相對峙すること三數年。兩軍對壘中間の地を。ノ、マンズ、ランドと稱す。取りて以て此驛に命づく。亦佳名適稱と謂ふへし。

### 彈痕地帶



(英國雜誌所載)

午前八時。白國ルーラー驛に達す。白國侍從武官某及參謀大佐某  
來り邀ふ。列車を出て、自動車に遷り。ブルージュに向ひ發す。行程  
二十有餘哩。一路磽确にして。左昂右低。車の動搖甚し。  
沿道久しく獨逸の統治する所と爲り。重斂暴征。民頗る窮約す。車  
中時に殘氓の蚩蚩として往返するを覩る。疲憊色に形はる。謂は  
ゆる苛政虎より猛なるものに非ずや。夫れ財豊に國富み。而して  
武備に懈り。燕安に忸れ。害を買ひ禍を速き。遂に此に至れるは。是  
れ白國今日の境遇。殆んと其自ら招くの禍にあらずや。宜しく取  
りて以て殷鑑龜鏡と爲すへし。  
ブルージュは。白國の一都府にして。其獨軍の統治を脱して。聯合軍  
に復歸せしは。纔に數十日前に過ぎす。爾時國王王后と偕に飛行  
機を聯ねて此に入りたまふ。國民感喜怵懼し。其勢波濤の洶湧し。

潭水の旋渦するか如くなりしと云ふ。

車ブルージの郊外を過ぎ、轉してオステンドに赴き、獨軍沿岸防備の施設、英國閉塞船隊の戦迹を觀んとす。沿道坦坦、田園相接し、枯楊路を狭み、景物冲融澹たり。疾駛してオステンドに達す。此地は夏時歐洲士女遊覽の勝區たり。然るに亂後層樓空しく屹立し、峻閣徒に森聳し、矚目殊に寂寞たり。

港口を距ること近く、獨軍潛艇根據地あり。獨軍の爲めには要衝たり咽喉たり。英軍乃ち水路を杜塞して、禍源を絶たんと欲し。本年五月九日夜に乘し雨を冒して之を襲ふ。其動作の敢勇なるは、昔年旅順に於ける我閉塞隊の壯烈に譲らす。而して更に之に加ふるに縝密周洽の畫策を以てし、豊盈富贍の材料を用ひし者。今眸を放ちて水上を望めば、當時の閉塞船緒腹を露はして、江口に

横臥し、波浪の一來一去之を洗ふを觀る。

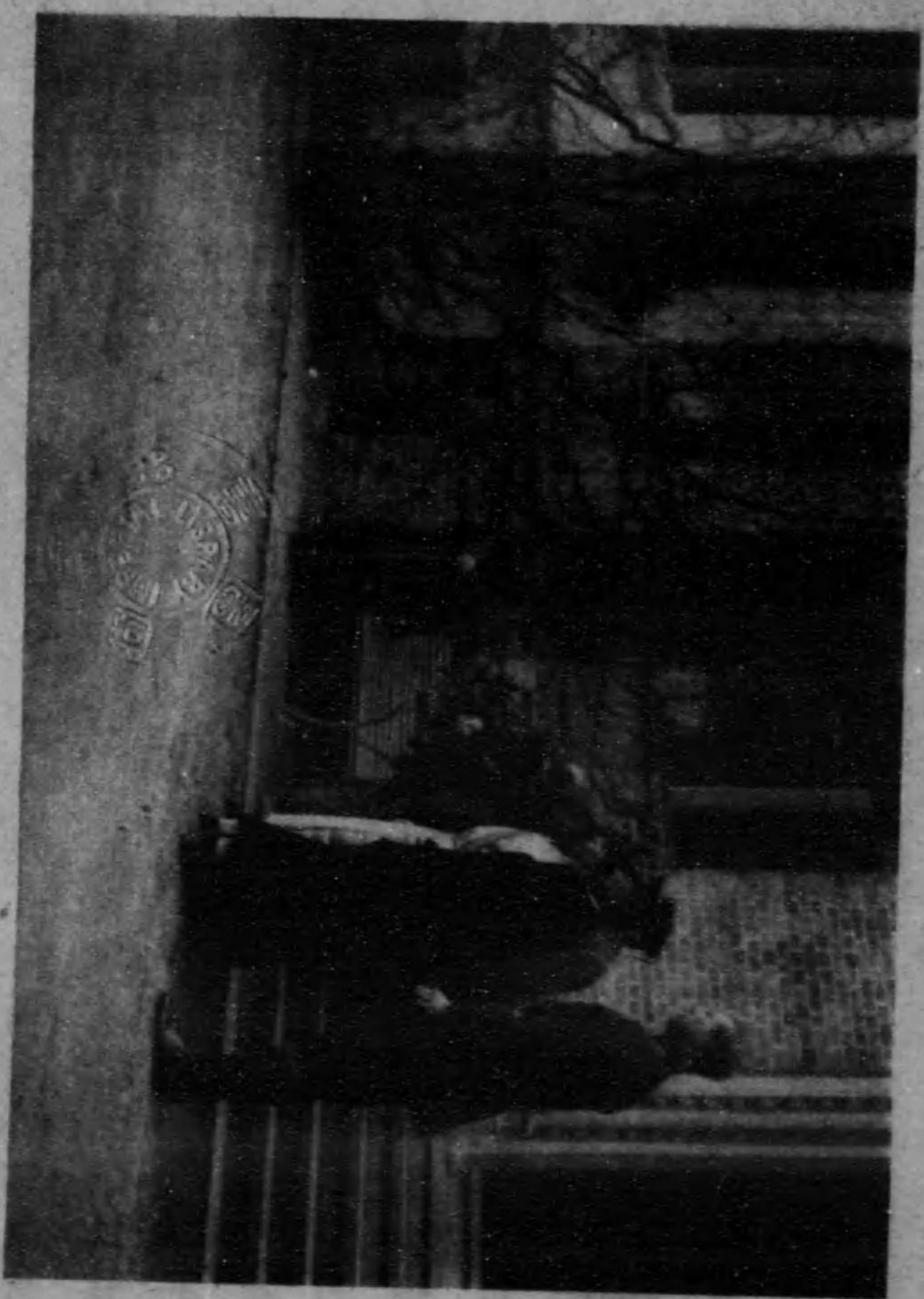
此地は獨軍英軍の或は強襲上陸することあるを慮り、特に意を海岸防禦に用ふ。試に一砲臺を検すれば、三十珊加農の巨砲六門あり。築くにベトンを以てし、圍むに鐵網を以てす。其砲床碎裂し、鋼板反張飛散し、巨砲撓屈傾倒せるは、蓋し獨軍退避に際し、自ら之を爆碎せしものなり。

晌午オステンドを去り、村路を馳すること凡一時間。ブルージ近郊の一莊園に抵る。樹林の間に、一字の別墅あり。閒靜にして清奥なり。即ち白國王の行宮たり。車階下に達す。一長軀の武官あり。扉を啓きて出て、親王を邀ふ。即ち國王たり。入りて王后王太子に謁す。少頃他室に遷り、親王聖旨を傳へて、國王王后に勳章を呈進したまふ。國王亦親王及隨員に勳章を贈りたまふ。余はオフ・アシ

ヤ、ド、ロールドル、ド、レオポール勳章を拜受す。

行宮は土豪某の別墅に係り。廣潤ならずと雖も。構造頗る雅潔なり。食堂に轉し。午餐の享を受く。聞く國王天懷恪勤。亂興る既に久し。而して未だ嘗て一日も暇逸したまはず。本日の如きも。上午戦線を巡覽し。下午始めて還御したまふ。王后も亦令徳ましく。民皆坤儀を仰く。而して王太子は。台資賢良。鶴算十六。英國貴族學校に學ひ。戰捷ちしか爲め。頃日暇を得て歸省したまひしと。太子は身に伍卒の被衣を服したまふ。

賓主桌に對して。一應一對。和氣雍雍たり。既にして乾盃し。賓主迭に親王及兩陛下の壽考康寧を祝したまふ。顧ふに英國宮殿の高宴に。一滴の酒を用ひたまはず。而して此一閑村の行宮に於ては。醇醪汪然杯に溢る。國の興廢存亡。其絲來する所尙し。一朝一夕の



ルニアラ一近郊白國皇室御候間  
右より 白國々王陛下、コソノト陛下、東伏見宮殿下  
白國皇后陛下、白國東宮殿下

故に非ざるなり。

午後三時行宮を拜辭す。國王親王を前檐に送りたまひ。王后親ら親王以下を撮影したまふ。一宮娥有り。忽焉として樹陰より出て。請ひて曰く。願くは日本武官を撮影せしめたまへと。丰容焯約。嬌愛すへし。去りてブルージ市に赴く。

ブルージ市は白國第三の都邑とす。人口三四十萬許。獨軍の羈絆を免れしより。厘厘數句を出てす。邦人の此に到りしは。開戦後蓋し我一行を始めとなさん。路上老嫗兒女の來り集り。車を繞りて歡呼するあり。喧慄特に甚し。而して其狀亦愛すへし。又伍卒の袂衣を衣て。路傍に立ち喫烟し。或は妙齡の女子と相伴ひて。小艇を水上に浮ふるを見る。國家危急存亡の秋。軍卒の間散嬉戲此の如し。白國の今日ある。亦偶然ならざるを知る。夫れ弱にして富むは。

寧ろ強にして貧なるの優れるに若かさるなり。  
 本市政廳の屋宇は、夙に史傳に見はれ、頗る名畫珍玩を藏す。政廳の比隣に、一古寺院あり。曾て全歐に覇たりしチャルス五世の靈柩を安す。又寺を距る數町、古美術品博物館あり。多く瓌器瑋寶を存す。皆一時獨軍の監領する所と爲る。然るに一物一器も毀損せず。依然現在せり。吾人相顧みて云ふ。想ふに獨帝は、本市を悠久に獨逸に歸せしと爲せしならん。是れ其敢て鹵掠せさりし所以のみと。謝して出て、四時三十分疾走してルーラー驛停留の列車に返る。

我森田砲兵少佐真、高橋砲兵少佐夫、多久工兵中尉利、及英國の接待武官ヒゴット少佐車中に在りて奉迎す。森田少佐等三人は、目下征に英軍に従ふ者なり。薄暮發軔し、赴きて英國の戦線に向ふ。

晚餐後、森田少佐等英軍各方面の狀況を上啓す。



### 英軍戰迹

一四三

十一日晴後霧。午前八時バブーム市を過く。本市は千九百十六年夏。ソナムの會戰に於て。英佛聯合軍攻勢の目標に係り。嗣後彼我鏖戰相踵きし所とす。全市畢く摧破し。滿目慘憺たり。停車場の標榜を一睇し。馳すること頃刻にして。英軍戰迹に達す。極目平蕪。蕭瑟寂寥たり。

英國接待武官ブランド少佐、ラブラン大尉等數人此に在り。親王を拜迎す。此に至り。吾人始めて休戰條約既に成り。本日午前十一時を期して。大戰の將に終らんとするを知る。則ち本日の戰迹台檢の適。大亂終尾の期に會する。亦奇遇と爲す可し。

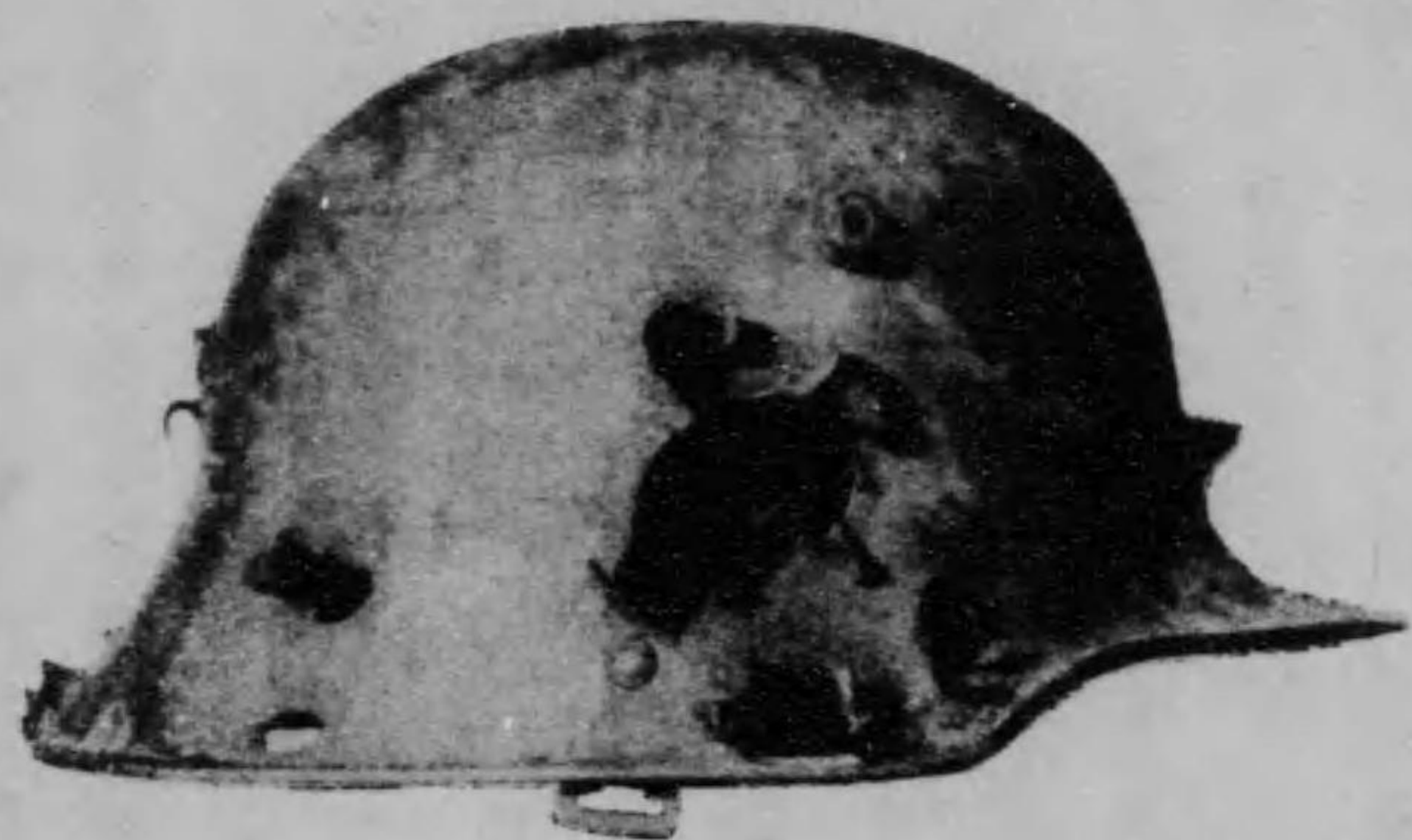
自動車に遷り。謂はゆるロンドンブルク防禦線迹に赴かんとす。是時親王以下。分れて甲乙二班と爲り。余は柴小栗二中將及雨宮

軍醫大監、山縣少佐と俱に乙班に屬す。ブランド少佐余を誘ひ。俱に無蓋自動車に乘し。嚴風に抗して進む。左盼右睇。悉く是れ荒原平蕪。一物の眸子を礙るなく。處所劍戟飛散し。砲痕歷亂たり。

疾駛大約三十分。ヴァンドキル村に抵る。ヴァンドキルは。レスカウ運河に沿ひて谷底にあり。此に至り。始めて獨軍防禦の設備を見る。兩崖點綴の村邑。皆兵燹に罹りて廢壞す。丘に依り谷に沿ひ。蜿蜒として鐵條網を張ること數帶。蟬聯繚亘。數十哩に達す。其遠き處は。晨霧の掩ふ所と爲り。漸漸として影を匿し形を失ふ。宛然萬里の長城を望むか如し。是をロンドンブルク第一防禦線の一部と爲す。即ち本年九月中旬。英軍多く血を流し鐵を費し以て陷摧せし所たり。

進みてボニー村に踵る。是を第二防禦線の一部と爲す。九月二十

一四三



遺棄せられたる軍服の歴史

九日、米軍進みて此正面に當り、乍にして死傷する者五千人之か爲め兵氣沮し、攻撃頓挫す。會、加奈太軍來援し、協力奮戦、纔に之を奪ふ。今來り弔へば、悲風愁煙、腥血漠漠、當日の光景、歴歴目に在り。余廢壞の塹壕中、獨兵の鐵盔鐵條網に懸れるを觀、拾ひて之を檢すれば、彈痕を被むること、實に二十有八。  
更に車首を反し、ベリクール村を過く。行々路傍に英軍の戰車數十臺遺棄せるを觀る。藥莢山積し、機關燐燄

す。總て是れ當日の戰鬪に毀損せし者。一日恍として力戰重創の勇士に戰場に値ふか如し。  
顧ふに戰車は、千九百十六年ソムムの戰に於て、英軍の始めて用ひて奇功を奏せしもの。今や佛軍獨軍も、亦各之を有し。以て複雑困難の塹壕戰に充用す。故に今日の塹壕戰は、之を我日露戰役の際に比すれば、其狀甚た懸殊せり。蓋し歐洲列國の富強を以て、國を賭し力を殫くし、輸贏を争ふ多年、宜なる哉。戰鬪機關の啓發進歩此に至れるや、而して帝國亦豈奮起激勵、大戰に參驗し、以て修短を取捨する所なかる可けんや。  
ベリクール附近は、地較、隆起し、サン、カンタン運河隧道を爲して、其下を貫く。獨軍の此地に在るや、隧道を以て戍兵の屯所と爲し、機關銃を備へ、以て自衛に充つ。乃ち洋燈を執りて河に降り、隧道

内を検するに穹窿の状を作し。深竊幽玄たり。物あり燈を掠めて飛ぶ。驚き顧みれば蝙蝠なり。歩歩前進すれば。船數艘を沈めて床と爲し。板を架けて階を設け。栖息の所と爲す。又庖厨を設けたり。曩日英軍の巨彈。偶此に炸爆し。曩炊の獨兵十餘名を斃すと。一瞥陰風肅殺。鬼氣人に迫る。

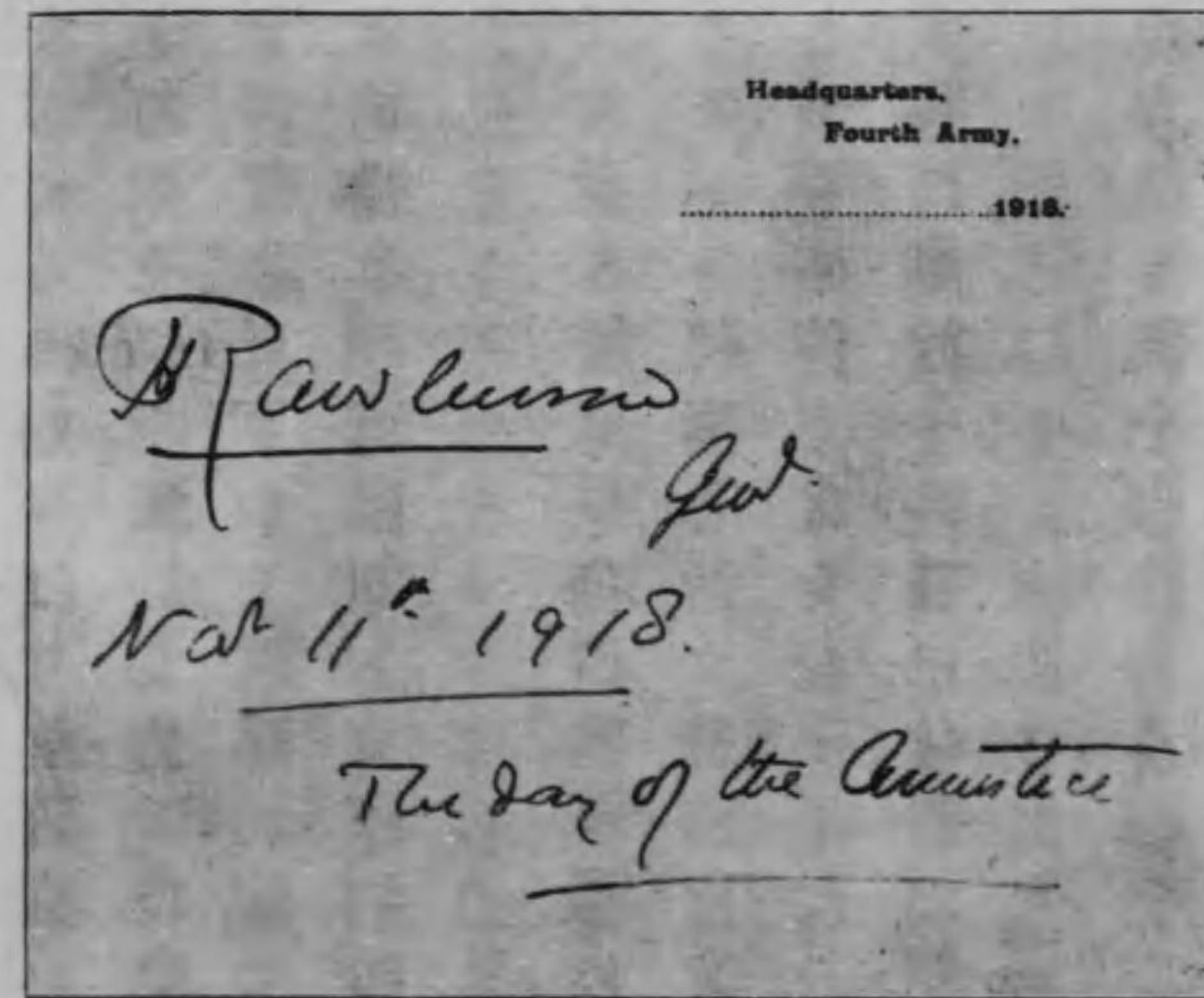
隧道を出て。南向して前むこと二哩。ベルングリーズ村に至る。本村亦サン、カンタン運河に瀕す。九月下旬激戦を経し。所村の背後は丘陵たり。獨軍此を穿ちて。隧道を設くること一哩半許。以て兵甲を増派し。彈藥糧餉を運搬するに便せり。又入りて之を検するに。電燈坑を燭らし。埋管風を通し。輕便鐵軌を布き。且諸所に晏息の室を設く。獨軍千籌萬策。諸凡の手段を竭し。以て我聯合軍に抗せしこと此の如し。

戦墟を巡檢し。一攻守の遺迹を討ぬるか如きは。寸陰短刻の辨する所に非ず。而して時既に午を過く。故に割愛して去り。自動車を驅り。荒蕪地を疾走すること十八哩許。ホネキー附近に達す。鐵軌あり。一列車停留し。英兵附近に徜徉す。列車は即ち英國第四軍司令部なり。

軍司令官ローリンソン將軍出て、邀ふ。將軍長身白哲。軍事に明敏なり。余に謂ひて曰く。余昔年キチナー將軍と偕に貴國に游ひ。君の邸第に於て饗醢を受けしと。予も亦善く之を記す。是に於て別後の康寧を問ひ。且時事を談す。時に午後一時。既に休戦の期に入る。

嗚呼休戦條約成れり。振古未有の大亂も終を告げたり。百千萬の生靈を犠牲とし。數千億の貨財を糜散せし。慘劇も。一場の夢に歸

したり。乃ち賓主相携へて。食堂車に移り。桌に對して杯を擧げ。以て戰捷を祝す。蓋し大亂の終熄に英軍戰線に遭遇し。英國將軍と俱に桌に對して之を祝す。亦何等の奇致そ。而して將軍自ら謂ふ。夢の如く幻の如く。其情猶ほ休戰の成りしを覺えさるか如しと。亦宜なり。食後將軍戯れに記念の署名を爲し。之を吾人に頒つ。



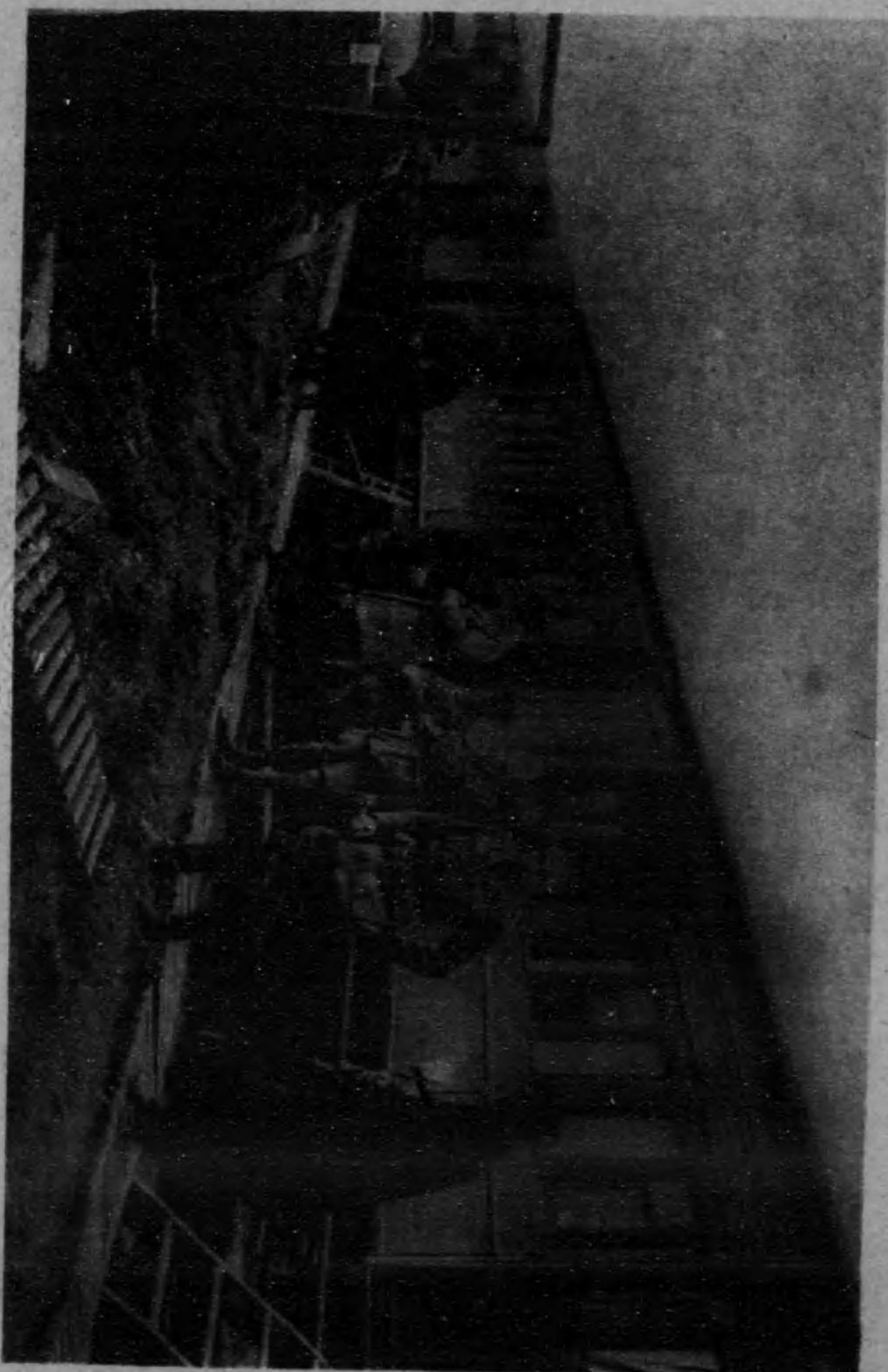
英第五軍司令部官ロリーソン將軍の手の蹟

二時二十分。轅を回して歸路に就く。荒野遼曠。沈雲低迷し。風尖く日短く。夕靄漸く積み。而して路猶ほ遠く。樹林の譚標とすへきなく。人家の就きて問ふへきなく。左右往反。心頗る焦勞し。六時漸くブリック、ミルに達す。ブリック、ミルは列車の在る所たり。此間親王以下甲班は。他方の戰場を巡檢し。英軍總司令部に臨み。ヘーグ元帥等と共に午餐し。英國皇太子も亦臨みたまひしと云ふ。是に於て甲乙二班合し。將に巴里に發軔せんとす。會他車軌上に輻集し。且大雨滂沱として至り。四顧黯黹たり。之か爲め荒野に停ること良久しく。九時纔に發し。深更巴里に返る。是日佛國始めて休戰條約の成立を宣布し。三百萬の都民。踴躍欣懌し。吾人の巴里に入るや。路上猶ほ子弟兒女の國旗を振り。凱歌

露光量違いの為重複撮影

を唱へて彷徨するを目す。

150



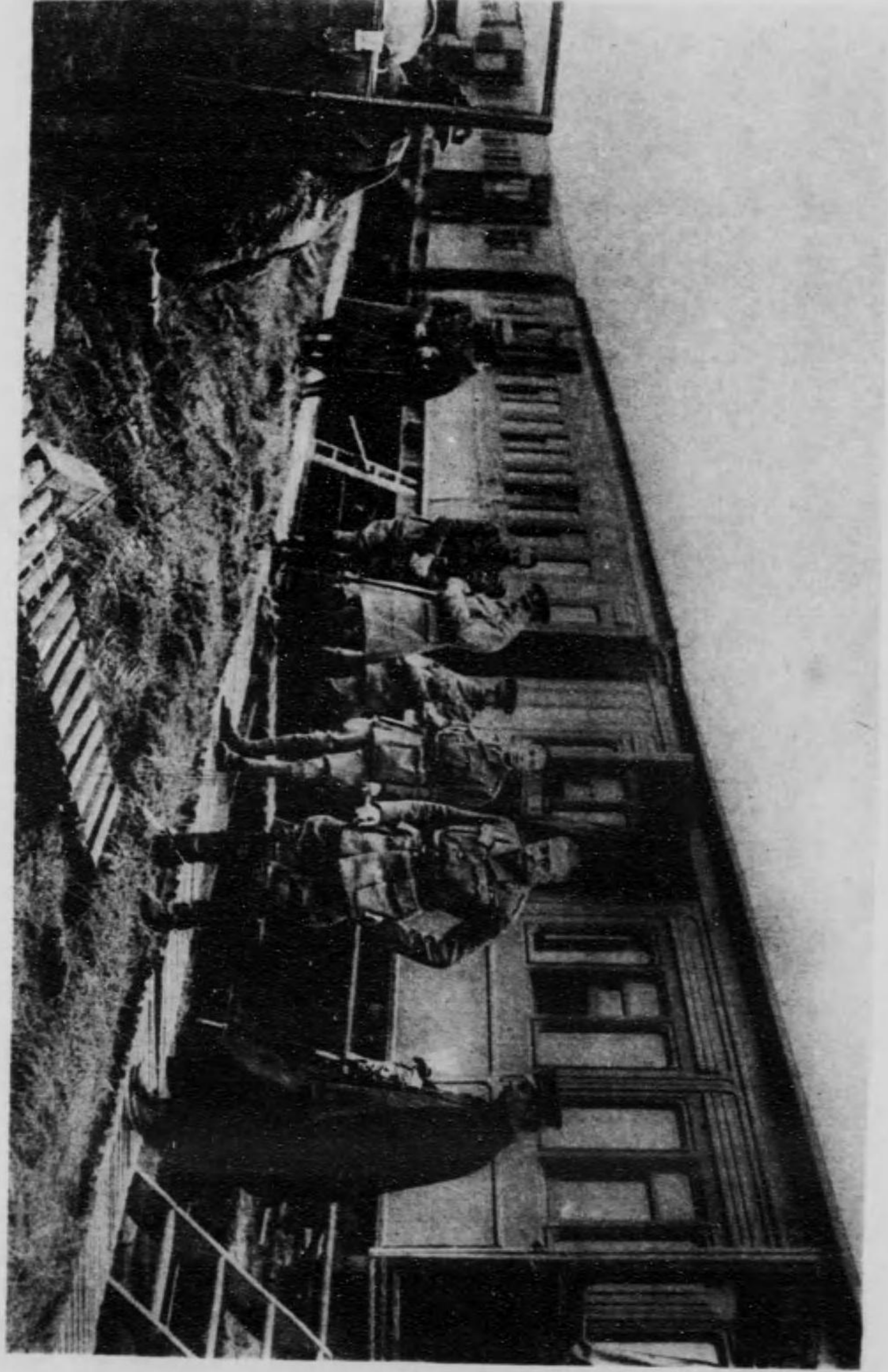
英軍總司令部台臨

(英國雜誌所載)

露光量違いの為重複撮影

を唱へて彷徨するを目す

一五〇



英軍總司令部台臨

(英國雜誌所載)

### 巴里市民祝頌

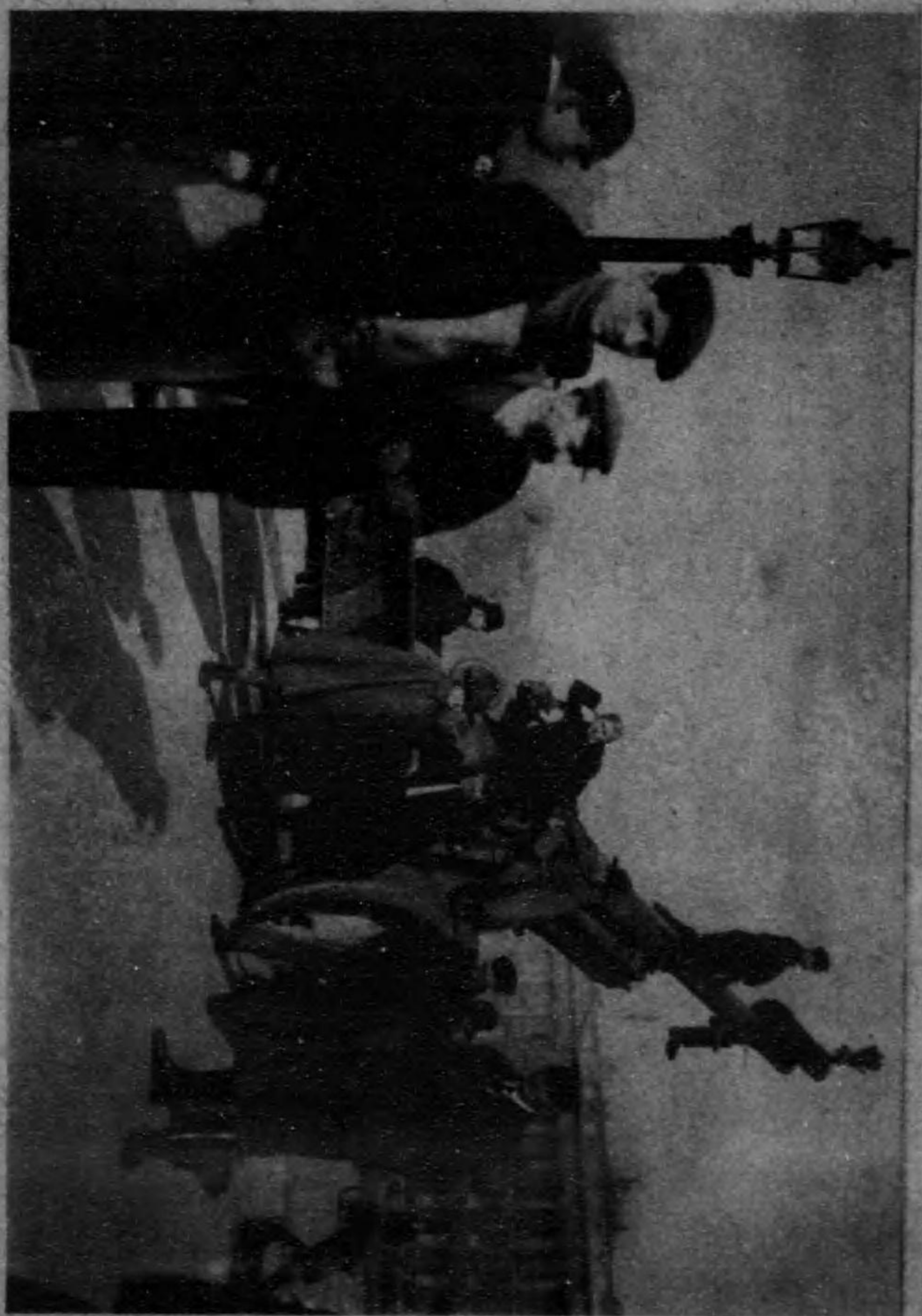
十二日快晴。巴里閩都休戰を祝頌し。戸戸廓を鎖し。國旗を掲げ。飾るに花卉を以てし。絢爛目を奪ふ。會天朗に氣暖く。神恬かに心和らき。陶陶然たり。

旅館前鹵獲兵器を臚陳する所。上午既に士女隊を作して至り。下午に比ひ。麤至麤集。宛然として奔潮の溢るゝか如し。

余試に自動車を驚せて。市に出て、光景を観る。路梗りて通せず。兒女の窓を敲きて同乗を乞ふ者あり。士人の輿に乘し鈴を鳴らして歡呼する者あり。而して一嫚罵嫚笑の語を聞かず。又男女相携へて低唱高歌するあり。鮮粧華服の女子絨衣軍裝の男子と歎狎親昵するあり。鹵獲の礮を拖き來り大聲喧闐するあり。兒女數百相携へて路を遮り伍卒を吊起するあり。子弟自動車に填盈し

數輛聯綿して國歌を唱へて過くるあり。亦殷亦賑たり。思ふに巴里は、曩きに屢砲撃に値ひ。將に獨軍の攻陷する所と爲らんとし。人皆惴惴焉として。朝夕を圖らす。而して今や乃ち獨軍屈服す。人心の狂喜此に至る。亦宜なり。而して目下巴里に於て尤輿望あるは。米國兵なり。米國旗なり。蓋し佛人中米國の聯合軍を援けしを多とし。頼りて以て捷利を得しと爲す者多し。然れとも識者は。猶ほ英國の功績を忘れず。往往車首に英佛兩國の旗を交又して馳過するを見る。

日既に晡れ。市民益熱中猖狂し。到る處の通衢。人の來り集る幾千萬なるを知らず。舊識たると生面たるとを問はず。相携へて祝し。相擁して慶し。闔都紛沓。變して歌舞の園と爲り。歡樂の圃と爲る。而して其間一忿争の起るなく。警士亦寬恕し。微笑して過くるの



凱歌



み。夫れ此の如く擾れて亂に至らず。樂みて節制あるは宜しく取りて以て則と爲すへきなり。

回思すれば今を距ること五年前。余伯林に在りて。大亂の起るに値ひ。今巴里に於て。其終止に遇ふ。伯林の士庶は。豫め勝利を期して。歡喜踴躍し。巴里の市民は。既に克捷を得て。欣懌歌舞す。彼我相較ふれば。彼は乾杯に演説に。放歌に高唱に。歡喜の中に。勇武壯烈の狀あり。此は則ち歌舞に歡樂に。優柔溫雅の風あり。又其人に於けるや。生面舊識を問はず。同國異境を論せず。卒然路に値ひ。一視同仁の風あるは。是れ佛人の特色ならん。

是夜親王佛國接伴員を旅館に召して。饗醢を設け。之を犒ひたまふ。餐後余等散策して。行行街頭に歌舞を觀。進みてグラント、オベラ前に踵り。市民狂喜の狀を目し。宵分歸る。

十三日快晴。晝間暇を賜ふ。乃ち午前十時旅館を出て。冬日の烘る所と爲り。自動車を駛せて。我陸軍歐洲觀戰武官を其旅亭に訪ひ。又大使館附武官永井大佐を官舎に訪ふ。途上エッフェル高塔の無線電信柱索を遠樹蕭林の間に望み。又エトアール凱旋門の半面。土囊を以て掩はるゝを目し。慨然として酣戰當時の巴里を想起す。

午後四時。大統領ポアンカレ來りて。親王を旅館に酬問す。土庶館前に雲集して之を觀る。會余他より返る。衆其自動車に日佛兩國旗を掲げしを目し。一齊に左右に披靡し以て通過せしむ。厚情掬すへし。

八時二十分。親王巴里を去り。伊國に赴きたまふ。初め親王伊國北方に適き。其大本營を訪ひ。然る後伊軍の戰線を巡檢したまはん

とす。然るに休戰條約成り。國王遽かに伊都羅馬に還幸したまふ。故に直に羅馬に向ひ發軔したまふ。

### 伊國行程

一五六

十四日。霧。夜來汽車に駕して南行し。午前十時アルプス山陁を過き。午後一時モダンに抵る。是を佛國邊界の驛とす。我伊國大使館附武官仙波歩兵少佐藝安來りて拜迎す。既にしてセニスの隧道を歴て。伊國に入る。隧道長三哩半。長程を以て世に聞ゆ。伊國國境の一驛に達すれば。伊國接伴員侍從武官海軍少將某。海軍中佐某來り邀ふ。聞く二人は國王羅馬に還幸したまはんとするに臨み。命を奉し。匆忙戰地より來れりと。故を以て。憤事に通せず。且其意速に家郷に歸らんと欲するものに似たり。三時四十分チェニス府を経て南指す。附近一帶。地勢平曠。猶ほ大陸の趣を存す。八時二十分ゼノア市に入る。車停ること一時有餘。乃ち小栗中將。山縣少佐と。夜を冒して市に出て散策す。

夫れ伊國は歐洲に在りては。富強と稱するを得ず。然れとも石屋崔嵬として。街巷の左右に櫛比するに至りては。我日本の及はざる所とす。蓋し木造土牆。一高一低して。通都大邑に櫛比する我國の如きは。實に歐洲列國に稀有とす。願ふに一時に偷安して。百年の長計を建てざるか如きは。心私に取らざる所。況や戰時空中攻撃の術益。進むに於ては。其れ遠謀深慮なかる可けんや。九時ゼノア市を發軔す。盡日車行。鞦韆鞦韆として。意微。無聊なり。新聞紙を検すれば。休戰後世事の推遷尤甚し。曰く獨逸皇帝和蘭蒙塵。曰く獨逸民人飢渴困約。曰く獨逸社會黨ボツダム王宮占領。曰く聯合艦隊土都コンスタンチノーブル入港。曰く伊國王羅馬凱旋。曰く白國王首府ブラツセル還幸等是なり。

一五七

伊王謁見

一五八

十五日。癸。午前十時二十分伊都羅馬に入る。監國ゼノア太公國王に代り來り邀へたまふ。太公頗る老齡たり。聞く國王は都を出て軍に蒞むこと三歲。曠昔始めて還幸したまふ。然れとも機務多端なるを以て。太公代りたまふと。文武大官及我駐伊武官亦皆來り迎ふ。駐伊武官に舊交大島歩兵大尉陸本、飯田騎兵大尉貞固あり。竝に士官學校の同窓生たり。我伊集院駐伊特命全權大使吉彦偶時疫に罹り。奉迎するを得ず。驛前には軍隊堵列し。府民雲屯霧集す。蓋し伊國總軍司令官デアツツ將軍の戰地より凱旋するを迎ふるなり。要するに羅馬の如きは。休戰を悦ひ常度を失ふものと謂ふへし。親王の鹵簿整齊として。羣氓の間を過き。ホテル、グランドに入る。

霎時にして。嗚噪歡呼の聲。俄に窓外に興る。即ちデアツツ將軍凱旋せしなり。

亭午親王に扈從して。バンテオンに造り。伊國先王の廟を拜す。親王豐麗の花環を獻供したまふ。バンテオンは古羅馬代興建せし所に係り。石を疊みて之を營み。地上に穹窿し。雄峻宏壯。一大半球の狀を成す。穹窿の下。右壁の所に。祖王の靈柩を安し。左壁の所に。先王の靈柩を安す。

午後三時。國王及監國太公に謁せんとし。馬車に駕して宮城に登り。城門を過くれは。近衛兵内庭を警衛す。殿陛を升り長廊を經れば。亦禁兵あり。端立森嚴。儀容偉然たり。

親王殿に入りて。國王と陛對したまひ。隨員は接賓室に入り。宮内大臣以下の邀ふる所と爲り。握手揖を爲し以て閑談す。少頃にし



(一 其) 殿 宮 王 伊

て國王親王と同しく臨御したまひ。握手の禮を賜ふ。王は櫛風沐雨。多年戰場に馳騁し。尊容爲めに羸瘦したまふ。廊を過ぎて別室に踵り。監國太公に謁す。太公は王に於て叔父たり。王軍に莅みたまふの間。居守して國政を綜理したまふ。台壽古稀を踰え。氣力仍ほ彊盛なるを拜す。親王既に旅館に還りたまふ。少時にして國王及太公來り臨みて。親王の進見に酬ひたまふ。之を拜すれば。各



(二 其) 殿 宮 王 伊

自動車に乗り。一二侍臣陪乘するのみ。此の如き簡質の鹵簿を以て。遽然として。市井の逆旅に臨みたまふ。寧ろ太簡なる乎。蓋し伊王は簡易なること是の如く。謙讓なること是の如し。而して始めて以て民望を維きたまふ。之を我 皇上の稜威神の如く。聖徳天の如く。深根固柢。恩澤深く人心に沁むに比すれば。固より日を同うして語るへからず。然りと雖も。今や云はゆる新異の思想。洋の東西を問はず。漸く將に瀾漫浸潤せんとす。

我國其れ亦顧省する所なかるへけんや。

是日國王親王以下に勳章を贈りたまふ。余はオフィシアル、コロナド、イタリヤ勳章を受く。

七時三十分再び宮殿に昇り。晚餐に列す。王宮は戦争の初病院に充て。傷兵を寄寓せしむ。故に本夕親王以下を饗するに。便殿を用ひたまふ。殿内狹隘。階に升れば則ち一室あり。國王及太公此に臨御し。宮内大臣以下文武諸官之に侍す。一揖畢り。食堂に遷る。

食桌の中央を國王の座とし。國王の右隣を親王及小栗海軍中將、伊國外務大臣とす。左隣一席を隔て、伊國宮内大臣及余とし。余に左隣するを伊國侍従少將とす。國王に對するを太公とし。太公の右隣を井上侯爵とし。左隣を柴陸軍中將とす。其他十數名之に列る。而して當直の近衛武官二名亦陪して桌の一角に在り。當直

將校を此に見るは。蓋し聖慮士を愛するに出てしか。

聞く亂興り。國王の軍に莅みたまふや。常に民屋に起臥し。未だ嘗て一日も國都に還幸したまはず。夙興戰線に立ちて。伍卒を振勵し。禁煙廢酒。衣を薄くし。食を單にし。以て範を全軍に垂れたまふ。故を以て輿望甚た隆んなりと。

餐畢り隣室に復し。喫煙閑話すること良。久うす。此間伊國貴紳の態度を目するに。進退揖讓。辭令風姿。之を英國宮廷の莊重なるに比すれば。亦太た徑庭あるを覺ゆ。九時退きて歸る。

伊國淹留

一六四

十六日。陰。後微雨。午前閑を得。仙波少佐を東道と爲し。柴中將と同じく自動車に駕し。市に出て、街巷を観る。中將及余は。往年二たひ羅馬に遊へり。故に粗。其勝槩を悉し。復新に探討すへきなし。乃ち公園に抵り。動物園を観る。

晌午旅館に還る。會國王親王を午餐に郊外サウオィアの離宮に招き。又井上侯爵。柴小栗二中將を召したまふ。會小栗中將他出し。旅館に在らず。余台命を奉し代りて召に應ず。

離宮は羅馬市を距ること一哩許に在り。林木蕪藹。鬱然として深秀し。別に一仙寰を成す。親王の造りたまふや。國王階上に出て、之を迎へたまひ。進みて奥室に踵る。國王乃ち王后王太子王女を各隨員に扮したまふ。

片晌にして扇開け。食堂に入る。食桌の一方中央を國王とし。國王の右を。第一王女及井上侯爵とし。左を第二王女及柴中將とす。國王に對して王后とし。王后の右を親王とし。左を王太子及余とす。而して侍從宮娃四五人之に陪す。

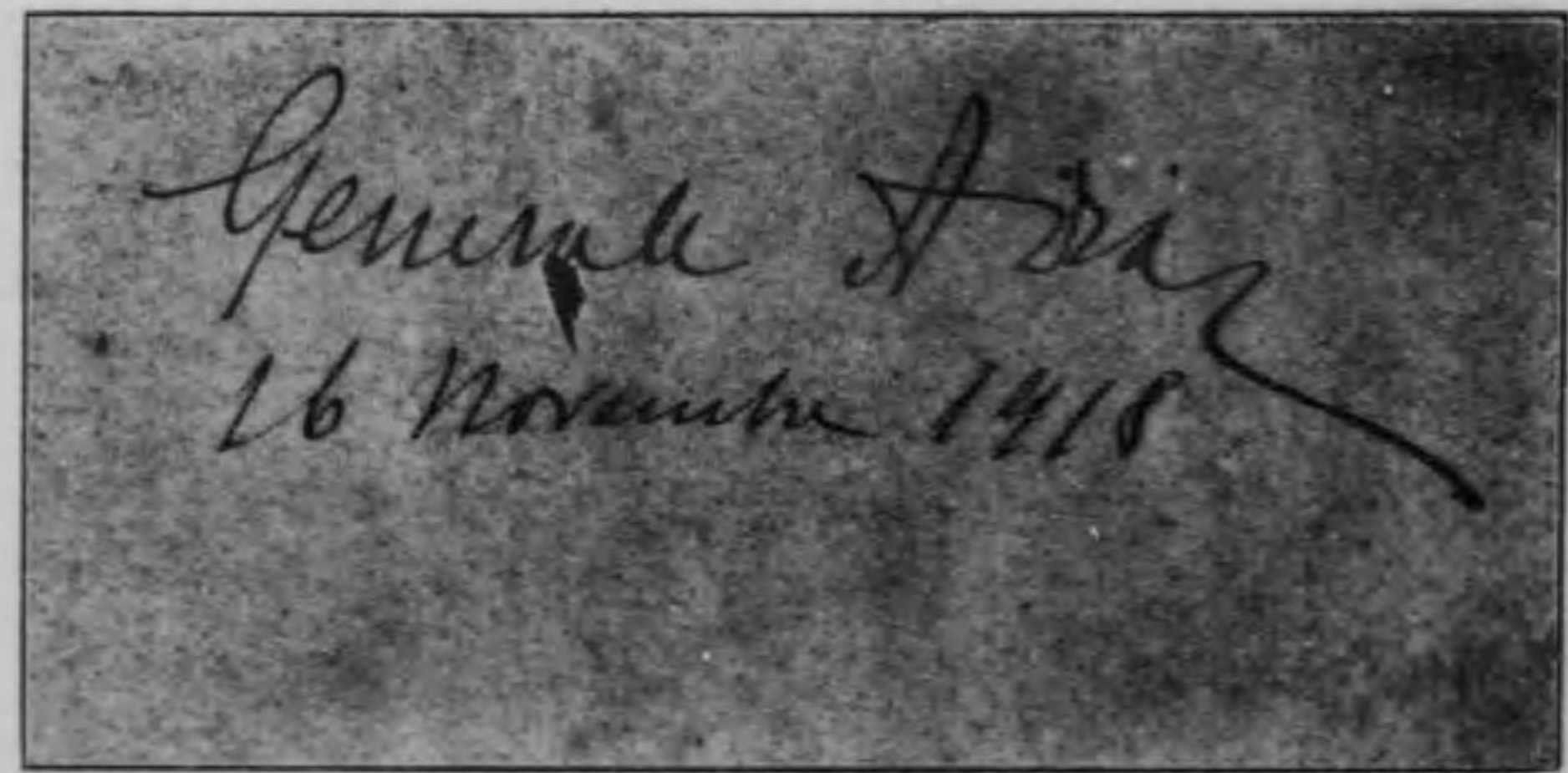
主賓桌に對して相話し。愉愉として歡情堂内に溢る。王太子齡十四。姿儀閑美。眉目明秀。人に對話する毎に。微笑を帯ひたまふ。品概頗る高くして。天資慈祥。之に近づけは。春風和氣中に在るか如し。蓋し徳望今より已に隆んなりと云ふ。

闌りて國王の誘きたまふ所と爲り。一小室に入る。戰場記念器物室に滿つ。悉く國王の採拾したまひし者に係り。破盔斷劍碎彈折戟等。無慮四五百許。纍纍雜陳し。悲壯の跡。歴歷目に在り。以て伊軍の苦戰困闘せしを徵するに足る。而して國王亦躬ら指示して。軍

一六五

中の逸事を宸話したまふ。既に歸る。王后特に使を旅館に遣し。親王及陪宴の隨員に戰場記念品數種を貽りたまふ。即ち記念室より抽擢せるものとす。午後四時。羅馬市長の招請に應し。キアビトリネ美術館に造る。本館は羅馬古代彫刻物の殊尤なるものを簡擇して之を臚陳す。亂興るに及ひて。衆庶の縦觀を禁止せりと云ふ。市長及貴紳數十名拜迎し。少頃館内に誘く。階上階下。長廊曲房。多く神仙人物の彫石諸像を臚列し。淳古の者あり。玄妙の者あり。奇巧偉麗の者あり。純樸高簡の者あり。其中ヴェニス女神の塑像。勇士臨終の彫像等の如きは。僞逸超拔。寔に世界の至寶にして。特に人をして駐眸せしむ。巡觀畢り。白色大理石像羅列の間に介立して。茶菓の饗を受く。親

王其厚意を多とし。貽るに鑄銀の手盒を以てしたまふ。市長以下把玩手を釋かず。之を月旦し。品評紛紜たり。以て國俗美術品を嗜み。好みて之を藻鑿するを徵すへし。五時歸館す。伊軍總司令官ディアツ將軍親王にホテルに候す。親王菊花大綬章を贈りて。其武勳を頌したまふ。日晡閑あり。往きて大島大尉を其僑居に訪ひ。伊國家庭の情況を視る。家に子女各一あり。男子は飛行將校たり。暇を戰地に得。歸りて家に在り。女子は音樂の教師たり。女子彈琴數闋。以て欣待す。既にして歸館す。七時半。



伊軍總司令官ディアツ將軍の手紙



親王伊國接伴員及我大使館僚を召して晚餐を賜ふ。  
是夜十一時發軔。再ひ巴里に返る。

### 歸佛車中

十七日晴。汽車ゼノアを過くるに比ひて天明く。眸を縦ちて窓外を矚れば。適伊國北方の平野を經んとし。朝旭淡紅草を射。滿目晃朗として。神氣頗る爽なり。

車中新聞紙を検するに。世事の變遷推易すること。走馬燈の如し。其一二を擧ぐれば。獨逸國情戰時の緊張。一朝弛解し。革命の兆横溢。政府は媚を人民に容れて。普く選舉權を與へ。言論の自由を許す。此間に處し。毅然として屈せず。孤巖の狂瀾怒濤中に卓立するか如き者を。ホンデンブルグ元帥とす。元帥は獨逸全軍の後退するに當り。泰然として之を統帥し。以て紀律を維持し。兵氣を既に沮むに回す。蓋し一大逆境に處して。綽として餘裕ありと謂ふ可し。

夫れ連戦連勝して籌を誤らざるは猶ほ易し。事非なるに至りて此の如きは其れ難き哉。嗚呼將軍の如きは豈錦上に裝を尙へ花を添ふる者に非らずや。

又傳ふ。獨逸皇帝皇太子は和蘭に蒙塵し。皇后は病にボツダムの離宮に臥したまふと。フレデリック大王の裔。ホーエンツォルレルンの王統。其れ終焉に庶幾らんか。往者露國皇帝内訌に殂落したまひ。今又禍獨逸に波及せんとす。吁。獨露の二國は歐洲立君の大國たり。而して今や乃ち此の如し。豈寒心せざる可けんや。

日晡汽車國境モダンに達す。仙波少佐、島田海軍少佐繁太、越田外交官補佐一、拜送。此に至りて去る。

隧道を貫きて國境を過くれは。夕陽赫赫の伊太利は。乍にして細雨瀟瀟の佛蘭西と爲る。室に入りて扉を閉ちて寢に即く。

### 佛國告別

十八日。天晴れ。晨光美しく。眺矚佳にして。田園の風物亦頗る鮮妍なり。午前十時巴里に入る。

是日暇を賜ふ。乃ち出て、街巷を散策す。平午我巴里駐在陸軍武官胥謀り。公園のロウラン旗亭に小集す。來り會する者。永井大佐、永持次源、西濱吉馬、二少佐、森五六、久納誠一、藤井輔三、大尉なり。桌上獨軍敗績の因由討究、戰術科學竝進論、新異思想防遏策等を題目とし。討論上下。意見百出す。既にして散去し。午後又街巷を散策す。七時三十分。我大使館に造り。邦風晚餐の享を受く。

十一時發軔して英國に向ふ。巴里驛に抵れは。コンノート殿下先づ在りて。親王を迎へたまふ。殿下は親王の伊國に赴きたまふに先たち相別れたまひ。此に至り復來り同伴したまふ。厚遇此の如

きは、一に英國皇帝の宸衷に出つと云ふ。  
 十九日。晴。午前八時。ブローニエ港に到る。英佛兩國兵士警列し。軍  
 樂に我國歌を奏す。親王隨員を率ゐ。徐ろに埠頭に臨みて。英國汽  
 船に乗したまふ。  
 九時解纜す。既にして船微搖徐行すれば。附近の士女役に服する  
 者。罷めて船側に追隨し。埠頭の末端に及ひ。手を舉げ帽を振り。以  
 て別意を表す。其狀良に可憐なり。  
 水路恬安。以て海峡を過き。十一時英國フォルクストン港に入る。  
 珍田駐英大使以下來り邀ふ。午後二時倫敦に返る。コンノート殿  
 下に停車場に拜別し。クラリヂス旅館に投す。  
 是に至りて。聯合友邦歴訪及國王元首謁見の一事完く畢り。今や  
 馴熟の英國に還り。舊識の旅館に投す。情味興懷。殆んど故苑に歸

るに異ならず。

## 倫敦再留

親王の再ひ倫敦に臨みたまふや。微行淹留の儀に依る。故に英國皇室及政府も亦格式を略し。綈禮を省き。但、自動車を供し。以て安適を謀る。各隨員も亦閑を得て。私事に服す。余は則ち往年淹留三載に及ふの故を以て。舊交多く。隨ひて應酬も亦繁し。又閑餘故山携歸の土産を購ひ。匆忙時日を消す。

二十日。天陰。噎にして。濃霧咫尺を辨せず。鬱陶尤甚し。亭午吉田駐英一等書記官の招きに應じて。セントジエームス俱樂部に如き。午餐の饗を受く。午後各所の塵舗を巡檢し。物を購ふ。薄暮邦人俱樂部に赴き。邦風の晚餐に即く。

二十一日。噎。濃霧較霽る。晌午アシャー氏夫妻等をホテル、サヴォイに招きて之を享す。余昔年アシャーの家に寓し。以て語學を修



秋晩のクレーバ、ドイツ

めたり。アシャーは。人に交るに信義を以てし。丁寧懇懇。誠に君子人なり。自後余窃に視て以て海外の一親朋と爲す。氏戦役を歴て。生計稍左し。余の會寓せしクレイゲート村の家の如きも。他人の有に歸し。今やイーンヤ村に遷れり。長男は海軍少尉と爲り。驅逐艦員たり。長女は陸軍大尉某に嫁せしに。今春大尉陣歿し。目下寡居せり。妙齡の女子。身に緇服を服し。人をして轉た痛悼せしむ。

ホテル、サヴォイは。休戦一たひ成り。

豊麗妍華。殆んと舊日に倍せり。而して海外の一知己と白を擧げ。以て此に閑談す。亦客中の一樂事たり。

是夜。同郷人の會に旗亭生稻に赴く。來り集る者を。倫敦在寓者以外。小栗中將、南郷大佐及櫻井理學博士二とす。賓主一揖座に即く。酒食下物。皆邦様に係り。城府を撤し。胸襟を開き。團欒快談。其樂陶陶たり。夫れ殊域邦人に値ふ。既に客愁を慰むるに足る。況や郷閭を同うする人に於てをや。小栗中將は親王台航の概略を話し。櫻井博士は其専門の學に關し。戰時聞見せし所を述へ。賓主樂飲して。權を竭し。十一時罷めて歸る。

二十二日。晴。正午往きて德川公爵久を其寓に訪ひ。偕に街衢を散策し。午時マルボロー俱樂部に餐す。マルボロー俱樂部は。英國皇帝を奉戴して。名譽會長と爲し。其聲價各俱樂部に甲たり。而して

親王及各隨員。英國淹留中。推されて其名譽會員と爲る。

是日我大使午後三時三十分を期して。賓客を引見し。又日英協會幹事委員等を招く。來り會する者三四百人許。親王台臨したまひ。隨員亦皆赴き會す。協會幹事等台前に列し。歡迎の詞を呈す。既にして茶菓の饗あり。賓主閑話。時に佳譚を交へ。亦盛事と爲す。

七時邦人俱樂部に如き。我駐英陸軍武官と會餐す。會。米軍に従ひし服部騎兵中佐真彦、鷺津歩兵大尉平松等亦來り參し。集る者十五六名。余曾遊此に在りしより。二星霜を閱しに過ぎず。而して爾時の武官。今皆去りて。一遺留者なし。駐外武官の交迭。亦頻繁と謂ふ可し。

二十三日。晴。午後一時九條男爵致良及尾高氏作豐夫妻、齋藤大使館書記官、博夫妻等をホテルに招き。午餐す。尾高氏夫人は。嫺威岡部子

爵<sup>長</sup>の女にして。九條、齋藤二氏は。往年學習院に於て同窓たり。既にして一齊にシヤフッペリー劇場に造り。歌舞を観る。婆娑踰躑。舞容雲の如く。興を引くこと淺からず。

晩に數友とプリンセス、レストランに餐し。又セント、ジエームスに觀劇す。劇目をアイズ、オブ、ユースと稱し。妙作奇構。聲價一時に高し。今之を觀るに。世風を描寫し。人情を曲盡し。俯仰低昂の間。逸韻佳致。良に人を動すに足る者あり。

二十四日。微雨。是日日曜に屬す。吾人倫敦に僑居する。沈寂無聊なること。日曜より甚しきはなし。市塵扉を杜ち。行人稀少。滿都眠るか如し。故に往年余の此に寓せしや。毎日曜は。必ず郊垌に出て。林嵐の氣を喟ひ。徜徉自適し。以て週日力學の勞を慰せり。

午後一時學習院に學ひし者胥謀り。邦人俱樂部に會す。來り集る

者六人。德川公爵、南郷大佐、齋藤大使館書記官、九條男爵、安場工學士<sup>健保</sup>及余なり。而して德川、九條、齋藤三氏は。余と儕輩たり。快談款話。時針の移るを覺へず。

七時三十分スウェーミング卿に招かれて。井上侯爵と同しく。赴きて晚餐に列す。卿は上院議員たり。往年我國に來遊し。我國俗を美とし。邦人を厚遇す。而して井上侯爵及余は。卿と特に親善なり。故に卿此宴を設く。二人の外に來り列する者を。德川公爵、森財務官<sup>賢</sup>、大久保正金銀行副支店長<sup>利賢</sup>及アーノルド夫人等とす。二十五日。微雨。响午田中少將夫妻の招きに應じて。ホテル、カルトンに赴き。午餐す。南郷大佐及英國砲兵少佐マースデンも亦來り會す。少佐は。近日將に日本に赴かんとする者なり。是日珍田駐英大使及森財務官、南條<sup>金雄</sup>、鹽川<sup>三四郎</sup>、高橋<sup>徳治</sup>、水川<sup>徳太</sup>、菊

池<sup>幹</sup>本<sup>巽</sup> 諸氏胥謀り。午後七時三十分を期して。亦晚餐の宴をホテル、カルトンに設け。親王の台臨を仰ぎ。随員を招く。親王臨みたまひ。余井上侯爵及柴小栗二中將、南郷大佐と造り。快談更の閑なるに及ぶ。

二十六日。微雨。台駕歸朝の期既に迫るを以て。旅館に在りて。行李を整へ。又出て、別を知人に告ぐ。此に至り。親王歐洲駐駕の一事全く終ると云ふ。

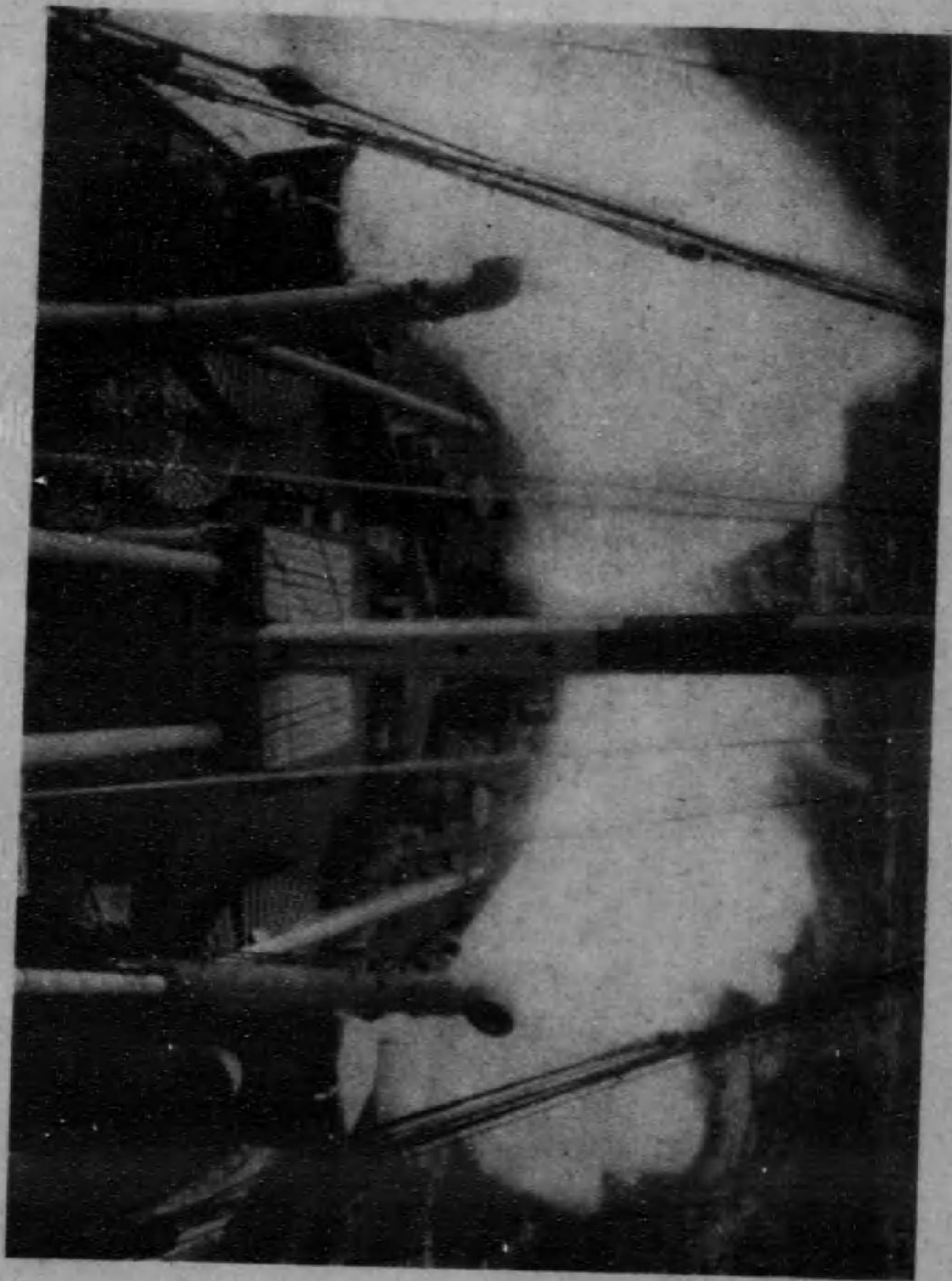
### 太西洋歸航

二十七日。晴。午前十時親王随員を帥む。パッディントン驛を發軔したまふ。在英の邦人。多く來りて奉送す。汽車驛を過ぐるも。停留せずして疾馳し。二百哩を過ぎ。午後二時デヴォン、ポートの埠頭に達す。兵士整列し。軍旗を掲げ。國歌を奏し。以て奉送す。其音波濤に響きて。瑤瑤鏘鏘として耳に徹し。一に親王に拜別するを惜むが如し。

既にして汽艇に乘し。夕陽を穿ちて。假裝巡洋艦オルヴィエトに遷る。オルヴィエトは。曩きに此に來りし時。一行を載せて危険瀛海を過ぎしもの。今や再ひ之に乘す。亦家山に歸るの思あり。珍田大使、田中飯田陸海軍武官、森財務官拜送本艦に至る。其謝して去るや。各人汽艇に立ち。帽を擧げ巾を振り。以て拜別の意を表

す。随ひて振れは随ひて遠く。看看艇形退小し。竟に夕靄中に没す。四時半拔錨し。勁風に抗して太西洋に向ふ。二十八日。雨。艦搖動甚し。二十九日。雨。艦の搖動止まず。黝雲低迷し。海上陰氣濛濛たり。

三十日。天門墨の如く。勃然として風起り。沛然として雨至り。洪濤生し。驚浪作り。樯吼へ索鳴り。悽慘尤甚たし。盡日風濤の聲を聽き。行李を齊頓する耳。夜活動寫眞あり。親王倫敦に入りたまふの光景を描出す。風濤の爲め椅に倚り搖搖として之を觀る。本艦の速力。一日三百哩とす。然るに本日は航程半に過ぎず。聞く太西洋を航する。毎年頃日の天候を尤も不良とすと。踰えて十二月三日に至るも。風雨已ます。航程大に減し。豫定の期に紐育に達する能はさるに至る。



大西洋の風浪



此間又無線電信を以て。世事の推易するを知る。云ふ四日米國大統領ウ・ルソン歐洲に向ひ。此洋を航すと。但水路南北相異にして。邂逅する能はず。

六日に訖るも。風濤猶ほ已まず。艦の搖動依然たり。デヴオン、ポルト埠頭解纜より此に訖る。既に一旬。天宇恬安ならず。鬱鬱として時日を経過す。

## 米國上陸

一八四

七日。味爽。艦紐育港に入る。一灣の埠頭。高樓峻閣。晨霧に幕絡す。行行遙睇して。午前八時第五十八號の埠頭に進む。然るに鐵船の設備完からず。爲めに上陸遅緩し。十時四十分に至り。始て上ることを得。

米國國務卿代理第三次官ロング。接伴員陸軍少將エドワード。海軍少將ロバートソン等來訪歡迎し。他に邦人米人多く來りて拜迎す。高峯工學博士吉謙父子。荒井米吉氏等も亦在り。渡歩兵大尉雄久駐米陸軍武官を代表して來り迎ふ。乍にして活動寫眞伴の一斑來りて撮影せんことを乞ふ。此輩動もすれば輒ち尊嚴を冒さんとす。米人の態度。由來類ね然り。特に人をして憎嫌せしむ。埠頭より自動車を駛せて。紐育の康衢を過ぎ。ペンシルヴェニヤ

停車場に至る。警官も亦自動車に乗して。駢驅護衛す。民庶填塞の所を經るも。警官一舉手すれば。即ち左右に披靡して。台駕を通せしむ。民主の米國。秩序あること猶ほ此の如し。以て楷模と爲すべし。夫れ口を開けは輒ち自由と稱し。而して専ら自家の自由を主として。人の自由を顧念せざるか如きは。眞の自由に非ざるなり。眞の自由は。公共の爲めに自己を檢束するに由りて始めて之を得へし。若し國家に自己を檢束せざるの徒猶ほ多ければ。則ち國運の隆昌。殆んと得て期す可らざるなり。

午後零時十分ペンシルヴェニア停車場を發軔し。華盛頓府に向ふ。汽車は特に貴賓の用に供する者に係り。凡百の設備。周到遺す無し。旬日風濤の爲めに搖動せられし吾人に在りては。特に清快を覺ゆ。

嘯時華盛頓に入る。米國國務卿代理ホルク、我石井駐米全權大使  
菊次郎等拜迎す。停車場外には騎兵森列し。軍樂に我國歌を奏し。都  
 人聚り觀る者。堞の如く牆の如し。ホテル、ワシントンに入る。  
 紐育上陸後、米國政府の賓待する所と爲り。行往坐臥。百爾皆便な  
 り。其厚意も亦多とすへし。

### 華盛頓淹留

八日。晴。日曜たり。市廓扉を閉さし。街巷閑寂なり。天宇晴妍なるを  
 以て。柴中將と偕に出て、觀光す。藤井大使館書記官實之か東道  
 たり。自動車を驅りて。西北郊外の廢兵院公園に赴く。一路平坦。左  
 右喬木森列す。

園は博大にして清曠なり。丘阜あり。池沼あり。神韻瀟灑たり。水湄  
 樹蔭に。廢兵の屋舎。隱見點綴す。中央の丘陵に寺院あり。劇場あり。  
 凡百游戲の設け亦備具し。廢兵をして優遊以て殘年を送らしむ  
 るに於て。遺憾なきに幾し。國家の民人を卹養する。厚しと謂ふへ  
 し。

進みて郊外ロック、クリーク公園に抵る。廣袤數哩。峰巒あり。喬木  
 立ち。谿谷あり。碧水流れ。梁を架け路を通し。能く地勢を利用して。

之に人工を加へし者とす。冬日熳熳として寒林を照し。落葉地に布き。清風面を拂ひ。一段の勝致あり。

谿に沿ひ林を穿ち。徑路を作り。以て騎行に適せしむ。亦用意の周到なるを見る。時に一群の男女。鑣を聯ね轡を按して至り。欣欣嬉笑。影を樹林中に隠し去る。宛然一幅油彩畫の如し。鶯花の暮春園に入り。騎馬半日の遊を爲し。嫩緑の間を徜徉すれば。神氣殊に清爽なりと云ふ。

余女子嬉遊の輕捷なるを目し。意に望むらく。我俗亦女子の戶外運動を獎勵し。以て其體を育はんことを。庶幾くは國家の元氣を涵養するに於て。大に裨益する所あらん乎。

轉して南郊ポトマック河畔に抵り。楊樹の間を駛せ。華盛頓記念塔及國會議事堂を觀る。塔は尖角高く聳え。屹として雄風あり。議

事堂は。嶙峋宏壯。眞に大都の盛飾たり。午後渡大尉を廳舎に訪ひ。閑談す。七時我大使館に於て。邦風の晚餐を饗せらる。

九日。曇。午前十時四十五分國務長官代理ホルク來りて。親王に見ゆ。氏の東道を以て。親王以下カピートルに造り。副大統領マーシ

ヤルを訪ふ。副大統領は親王の遠來を謝し。且頌して謂ふ。軍興りしより。貴國の力を效されしこと甚た多し。寔に感荷に堪へず。願くは後來日米の親睦。益厚く益幸あらんことを。既に返り。亭午渡大尉と與に餐す。



華翁記念尖塔

是日參謀本部。米國戰時努力情狀の活動寫眞をニッカーボッカ  
 劇場に演し。紳士淑女の觀覽に供し。親王の台臨を請ひ。又各隨  
 員を招く。四時造り觀る。外交團員及内外諸名士多く集る。  
 幔を撤するや。劈頭にニュー、グローリー、フォーア、オールドの四  
 大文字を描出す。偉勳古人に愧ちずの謂ひ歟。時に國歌大に作り。  
 觀客意氣頗る昂る。

描畫は戰爭の準備。徵兵の抽籤。新兵の訓練。海外の輸送。戰地の生  
 活。戰鬪の光景。戰場の慘狀。捕虜の後送。後方勤務の活動。戰時婦女  
 の貢獻。鹵獲兵器の堆積。パーシング總司令官の論功等數閱なり。  
 次を追ひ序を逐ひ。米國の偉業を發揮して遣すことなし。  
 願ふに米國の義に仗りて。大戰に參與し。滄海を踰ゆること數千  
 海里。以て二百萬の大軍を輸送せしは。振古絶無の鴻業とす。普く

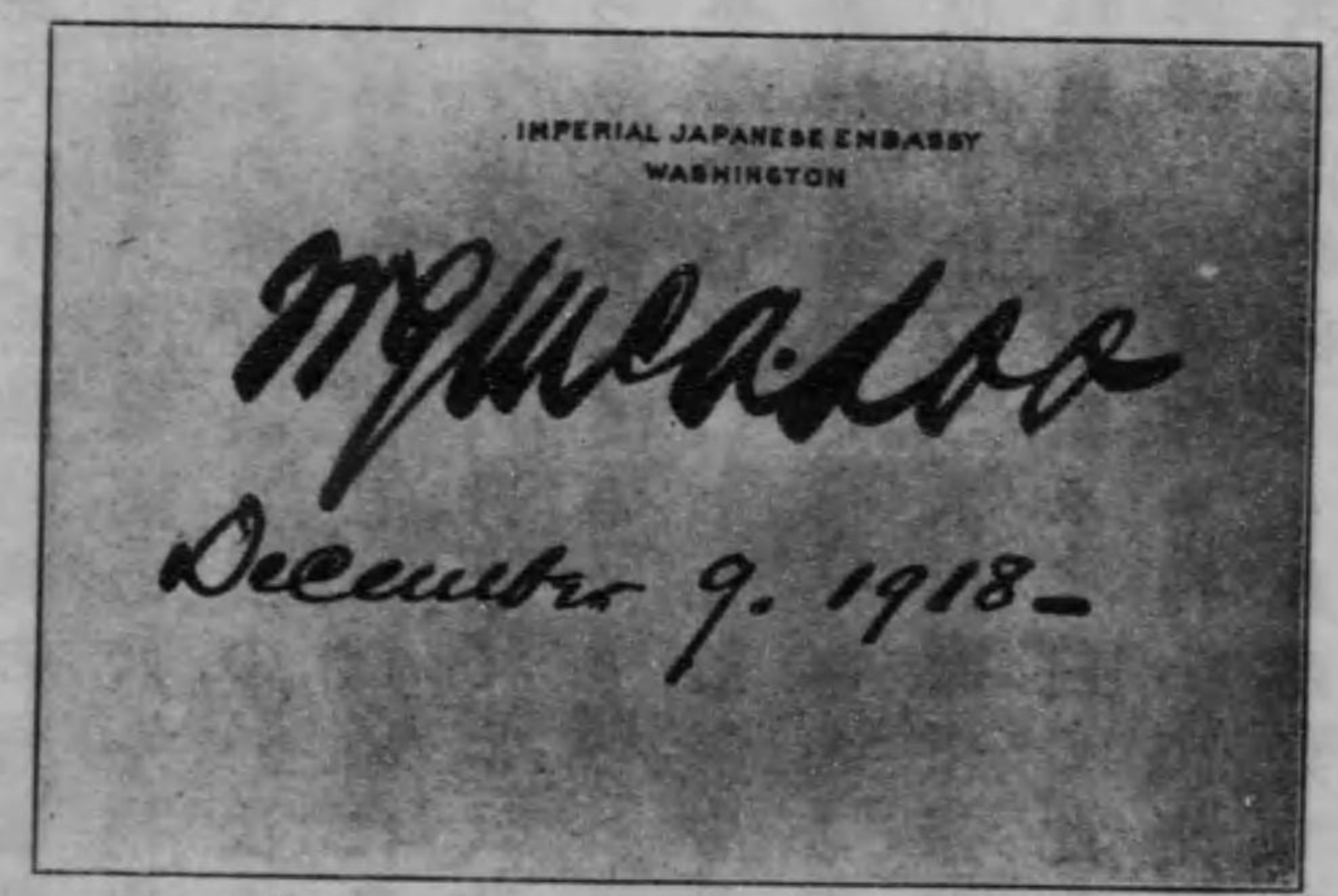
此鴻業を宇内に傳へ。垂れて以て後昆に示す。活動寫眞の效驗利  
 用も。此に至り顯赫なりと謂ふへし。且此種忠愛報國の狀を描出  
 するは。人をして觀感興起する所あらしめ。亦教訓獎掖の一法な  
 り。抑我帝國の如きは。大戰に參與して。巨利を博し。之か爲めに世  
 風漸く將に奢侈蕩佚に流れんとす。余今本描畫に對して。米人鞠  
 躬盡頓の狀を目し。窃に心に忸怩たらざる能はざるなり。

エドワード將軍余の左隣に在り。將軍は今春第二十六師團を帥  
 ゐて出征し。シャトー、チャーリーの役。戰功あり。將軍自己率ゐる所  
 の師團の光景。畫面に躍如たるに迫ひ。拍手怡悅し。米兵礮煙彈雨  
 の野を稀突し。以て戰ふの狀現るゝに迫ひ。余を顧みて曰く。此れ  
 是れ實寫なり。實際なり。爾時活動寫眞の一斑。硝煙を衝いて至り。  
 爲めに創を被る者三名に及へりと。夫れ此の如くなれば。則ち此

描畫の如きは流血購ひ得しものと謂ふへし。將軍の怡悅する亦宜ならずや。

七時三十分。我大使館に晚餐の宴あり。親王を正賓とし。各隨員陪し。又米國大藏大臣以下各省大臣陸海軍將帥等名士數十名。招きに應じて至る。就桌に前たち。親王米國參謀總長マーチ將軍以下武官數名に勳章を贈りたまふ。

藏相マッカドゥは。頗る令譽あり。異日の大統領を以て擬せらる。參謀總



米國藏相マッカドゥ氏の手の蹟

長マーチは。軀幹修長。靜默寡言。性格將軍の如きは。蓋し帷幄運籌の良器たらん。

既に食桌に即き。樂を張ること翕如として。音諧ひ調和す。宴畢るに垂んとし。藏相起ちて。我 皇上の萬壽を祝す。親王亦起ちて米國大統領の康寧を祝したまふ。十時各散歸す。

華翁村莊

一九四

本府を距ること十數哩。郊外に一邨莊あり。其地ポトマック川ウ  
・ルノン岡を縈繞して流れ。蕭閒澹遠。別に一境を成す。是を米國  
創業の英雄第一世大統領ワシントン晩年隱栖の所と爲す。  
翁功成り名遂けて此に來り。閑雲野鶴を友とし。優遊以て殘年を  
送る。翁遺愛の什器。今猶ほ悉く莊内に存す。園庭の樹下に。翁の墳  
あり。華府に來る者。必ず輕裝短笻此を過き。風に臨みて翁の徳を  
景仰し。其墳を一拜するを常とす。

十日。曇。午前九時接伴員を導者と爲し。親王以下各隨員。自動車を  
駛せて此に赴く。一路坦坦砥の如し。既に村莊に達す。導者門を啓  
きて誘く。喬木古徑を狭み。落葉砌に滿つ。乃ち踐踏して前めは。秋  
草岡に布き。甍の如く鬪の如く。上に粉壁の館舎あり。風物冲融。自

ら塵寰を脱す。

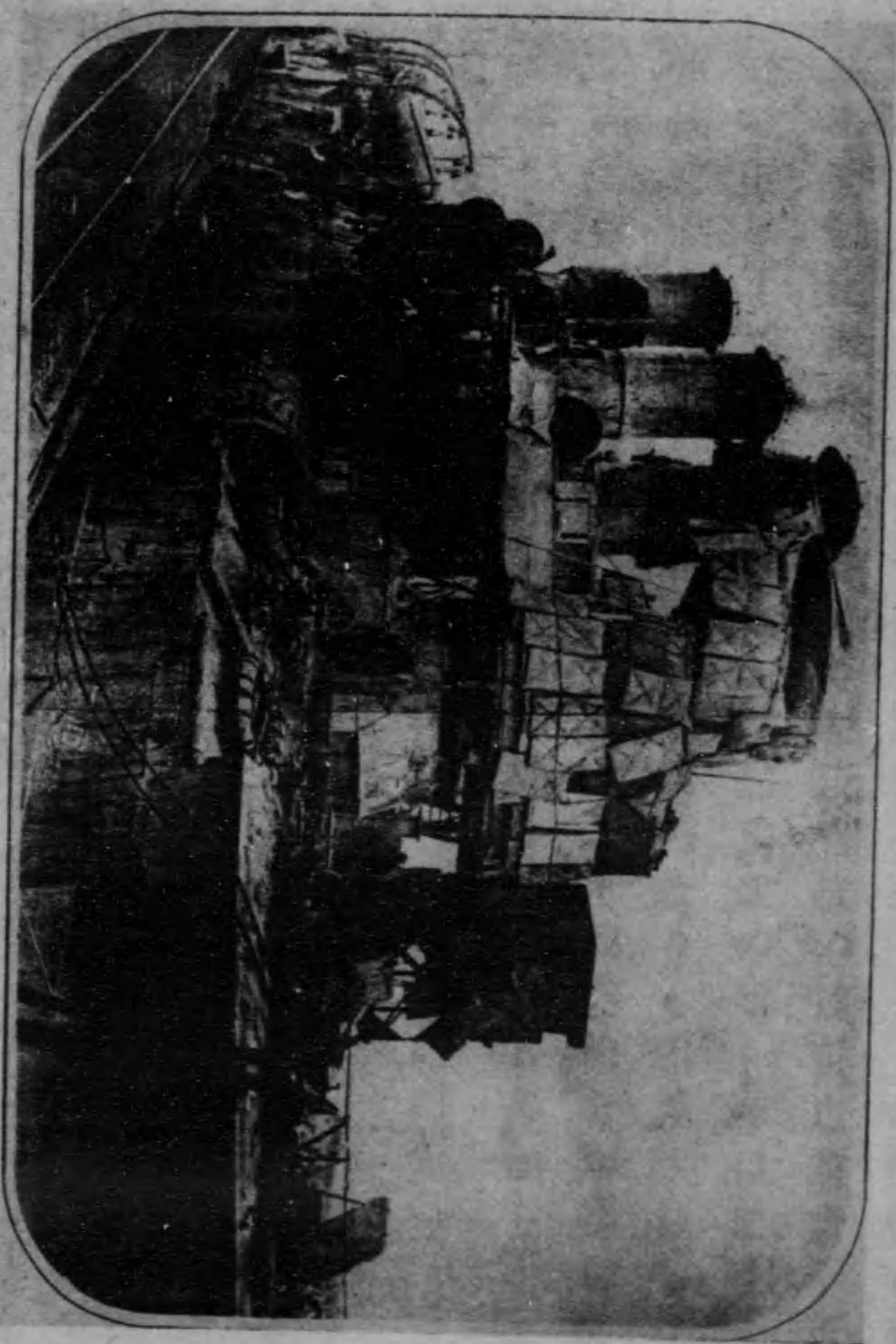
既に入る。凡百の陳設。清雅高潔にして。遺愛の文書器物を觀れば。  
人をして翁の事蹟を緬懷して。俯仰低徊去る能はさらしむ。階上  
の各室は。畢く是れ素朴にして。家人の寢所たり。中に翁終焉の室  
あり。此に到れば。恍として翁に冥冥漠漠中に晤するの感あり。  
嗚呼大業を創むること英雄の如く。盛徳あること聖人の如く。而  
して優游以て殘年を送るは。一田舎翁と埒し。翁の翁たる所以。其  
れ此に在る歟。其れ此に在る歟。

窓外を目すれば。丘阜低斜して水に接し。清風徐ろに來り。靜に淪  
漣を漾はす。華盛頓附近の學生。時に行廚を腰にして來り遊ひ。以  
て其氣を養ふと。少年をして觀感興起せしむるに於て。允當の地  
と謂ふへし。

樹間を迂曲して翁の墳に詣拜す。石に鐫して曰く。千七百九十九年十二月十四日永眠すと。親王墳前に花環の美麗なるものを供へたまふ。翁性恬淡寡欲。而して事に當る剛健果決。一に出たすに至誠を以てす。米國の重熙累洽。以て今日に訖れるは。翁の遺德垂範に由る者。實に鮮からすとす。宜へなる哉。國民崇敬欽仰して。國祖と爲し國父と爲し。此に來る者。月日踵を絶たさるや。

晌午旅館に還る。出て、ホテル、ニュー、キラードに造り。渡大尉、藤井書記官、田財務官、昌及廣瀬豊作を招き。午餐を享す。廣瀬は余か家の敬義塾に寓し。與に俱に切磨礪せし者。今年秋米國に來り。田財務官に隸して紐育に在り。余の華府を過くるを聞きて。倒展來訪せしなり。

餐後コルコラン繪畫館に赴く。本館は英國海軍戰績の寫眞を展



コルコラン繪畫館を飾る英艦クインデイクライアの雄姿



布し。聲價甚た揚る。場に入れは。ジャトラントの海戦の光景。潜水艇の行動。深海水雷の爆破等。斬新秀拔の描畫。亡慮數十百張。或は之に施彩し。或は之を伸大し。壯烈勇武の狀。一一目に映す。英國の自國功業を海外に宣傳する。其策巧なりと謂ふへし。

六時。台駕旅館を發し。停車場に向ふ。米兵前後を警護し。馬蹄蹀蹀。儀衛整齊たり。時に燈燭滿街。煌煌として白日の如し。

七時發軔。桑港に向ふ。

## 大陸 駛車

一九八

十一日。曇。汽車ベンシルヴァニア、オハイオの二州を徑し。林木蒙翳中を穿ち。市俄古府に抵る。中途淹遅せしか爲め。日既に暮れ。市に出て、觀光すること能はず。徑ちに市俄古俱樂部に赴く。本俱樂部は。士紳名流の集會する所とし。構築宏壯。古にして清く。雅にして潔なり。乃ち軍管區司令官以下諸名士と食堂に入り。一大圓桌を圍みて晚餐し。十時三十分發軔西行す。

十二日。天明くれは。滿目曠野。烟雨微茫たり。處所に大農法耕佃の經營施設あるを散見す。午前十一時。カンサス市に到る。カンサスは殆んど米國大陸の中央に位し。極めて要衝の地にして。附近平原の陸産。多く此に集散し。商工諸業尤盛にして。人口三十有餘萬あり。輓近俄然として蕃昌を致すと云ふ。

汽車小停して發す。行行眸を縦ては。カンサス州の平原。雲に連り天に接し。杳杳茫茫。廓として際涯なく。人をして轉。米國富厚の測識す可らざるを想はしむ。

十三日。黎旦コロラド州に達す。將にロッキー山系に近つかんとし。一望すれば地平原の如く。而して漸漸高壇と爲り。汽車漸を以て昂進し。今や海拔四千尺の所に在り。此間遙岑遠巒。左右に屏立し。烟靄縹渺として。我關東原野に筑波山を望むか如く。甚た其高きを覺えず。而して皆海拔一萬呎許の峻嶺とす。

トリニダットを過ぎて。ニューメキシコ州に抵る。此地アメリカインディアン及西班牙人雜居す。西班牙人は。墨西哥時代より此に遷居したるもの。隨ひて風殊に俗異に。頗る耳目に新なり。停車場の建造は。熱帶地方に摸擬し。以て土地に適せしむ。

一九九

午後七時アルプクエルクニ驛に到る。本驛の附近。インディアン  
の棲息するもの尤多し。驛前に小店あり。氈毛、陶器及繪畫の郵賤  
等を售る。

盡日輻輳として馳せ。汽車本州西方の山地に入るに及ひ。玻璃窓  
外。暮色蒼然たり。

### グラランド、カニオン探險

十四日。晴。黎明汽車アリゾナ州を過く。此間一帯。ロッキー山系に  
屬し。地益高隆す。然れとも峻嶒崇巒を見ず。率ね砂磧疎林の高原  
とす。

午後三時。ウキリアムス驛に抵る。驛店にインディアン手工の器  
玩あり。又樹片の化石せるものを臚陳す。附近高原の一角に。僵樹  
石に化して散在せるもの多しと云ふ。是に於て。サンタフェ鐵道  
幹線よりグラランド、カニオンの支線に遷る。グラランド、カニオンと  
は。大深峽の謂にして。其名遠邇に聞ゆ。將に往きて之を探險せん  
とするなり。

既にして發軔す。行行砂磧中を駛せ。四時十五分グラランド、カニオ  
ン驛に抵る。乃ち驛前のホテル、エルトヴァに投ず。ホテルは。大深

二〇二  
峽の崖上に屹立す。直に走せ赴きて崖端に立つ。一望驚神動魄。嗒焉語なし。

峽は一大地殻坼裂して低窪せしもの。巖巖として艱阻し。岸岸として險巖し。大觀大景。奇絶壯絶。天下無雙たり。其長二百十七哩。濶十哩許。而して深五千呎。コロロド川の濁水。峽底に暗流し。兩岸剝缺。峻嶒崇岬。高低上下して級を爲し。山骨出で。地層露れ。其色丹赭黄褐。崖上に立ちて遙矚すれば。一大地殻巨口を坼きて碧空を呑まんと欲するか如く。下瞰すれば幽昏玄邃。足戦き目眩す。而して峽の兩側。地勢平坦。且其高低相均し。試みに十哩の長橋を架くれは。則ち水平線と爲り。其断面應に一大V字状を呈すへし。時に夕陽赫赫。峽中を射。雙目炫耀す。若し夫れ白雲羃羃として。峽底に湧起し。以て對崖を蔽ふの際。此に立ちて長嘯せんか。人をし

て恍として地球の絶根に立ち。以て他界に對するの思あらしむと云ふ。

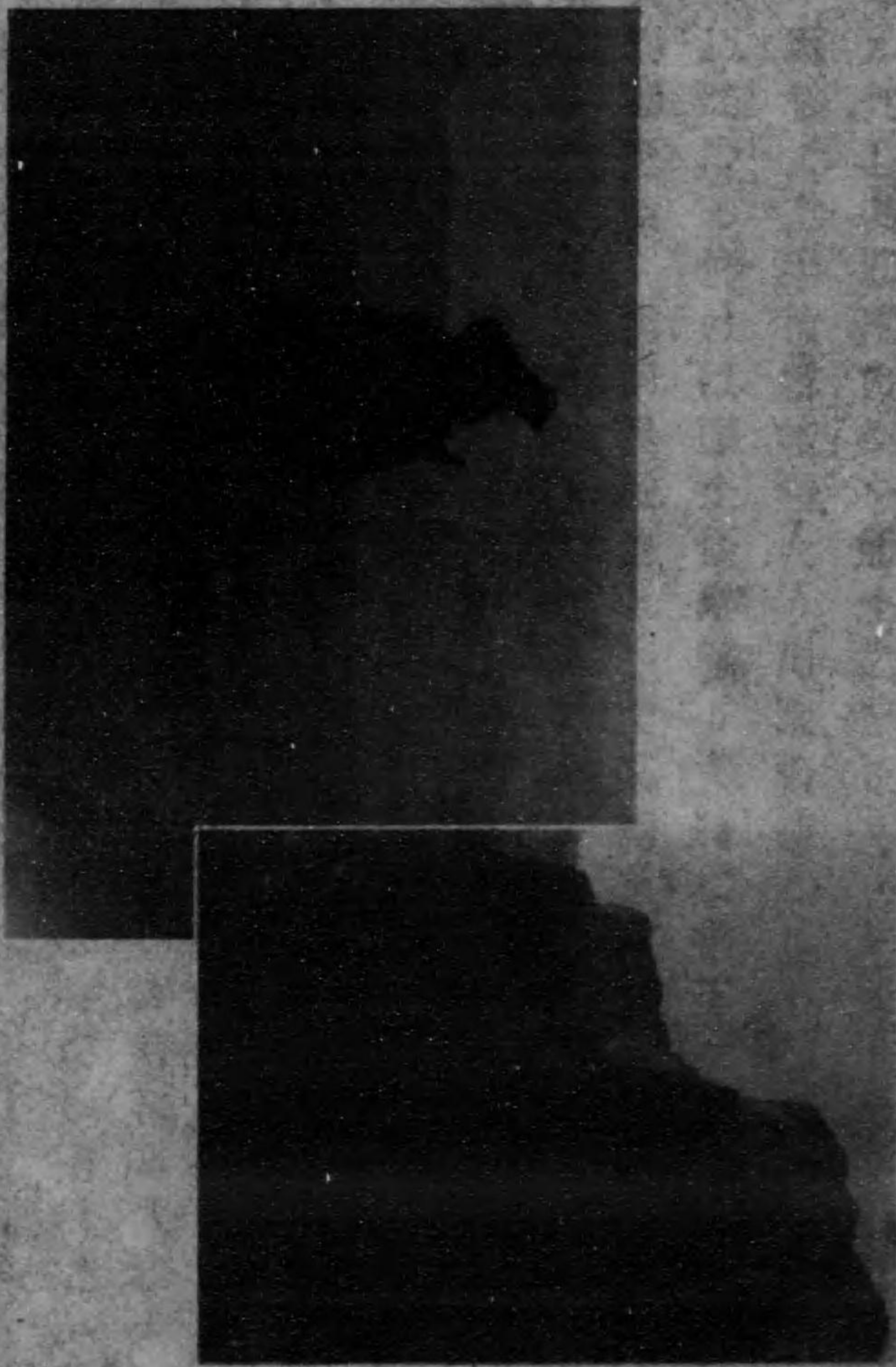
此峽は。在昔アメリカインディアンの始めて發見せし所とす。然れとも其年代の詳なるは。得て徵すへからず。千八百六十九年に訖り。米人ポーエル少佐。峽の秘奥を探究せんと欲し。壯夫十數名を帥る。扁舟に棹し。コロラド川の上游よりして下り。崎嶇間關。備さに酸辛を嘗め。踪跡を失ふもの數名。數十日を閲て。終に能く魔境の實際を探究し。其名始めて世に聞ゆ。今史籍の其事を録する者を讀め。人をして悚然として。肌に粟を生せしむ。

旅館は。渾木を以て之を營み。瀟灑にして雅致あり。夜インディアンの兒女。館前の驛店に會して。舞蹈を爲す。造り觀れば。身に敝衣を著け。華彩の羽毛を以て頭背を飾り。男女相伴ひ。鼓に合せて節

を取り。手を舉げ足を揚げて踊躍す。其狀單純簡樸。蠻野の風あり。  
是夜參半。扉を啓きて戶外を窺へば。弦月天に挂り。深峽寂として太古の如し。  
旦日親王隨員を従へ。片崖に沿ひて峽下を闕ひ。以て其壯大を睇たまはんとす。然るに余は峽底を極むるの意。勃勃已ます。少壯接伴員デヴィス中尉と謀り。早起騎馬して探險せんことを約し。寢に就く。

十五日。晴。夙に興きて輕装し。將に發せんとし。之を柴中將に諗く。中將云ふ。甚た妙。余老いたり。雖も亦同伴せんと。乃ち導者を合せて四騎。徐ろに峽底に降る。  
崖剝削屏の如く。險にして谿罅犖确。宛も智井に入り噴火口に下

峽谷探險



巖崖屹立三千尺

を取り、手を挙げ足を揚げ以て踊躍す。其狀單純簡樸。蠻野の風あり、  
是夜參半、扉を啓きて戶外を窺へば、弦月天に挂り、深峽寂として太古の如し。  
旦日親王隨員を従へ、片崖に沿ひて峽下を闕ひ、以て其壯大を睇たまはんとす。然るに余は峽底を極むるの意、勃勃已ます。少壯接伴員デヴィス中尉と謀り、早起騎馬して探險せんことを約し、寢に就く。

十五日、晴、夙に興きて輕装し、將に發せんとし、之を柴中將に諭く、中將云ふ、甚た妙、余老いたりと雖も亦同伴せんと、乃ち導者を合せて四騎、徐ろに峽底に降る。  
崖剝削屏の如く、險にして谿罅犖确、宛も智井に入り噴火口に下

峽谷探險



巉崖屹立三千尺

るか如し。其間纔に徑を通す。之をブライトアンジェル山徑と稱す。而して上半積雪皚皚たり。馬蹄斬断として雪を蹶り。巖嘴を踏み以て降る。仰けは頭上怪巖懸りて。將に墜下せんとし。俯せは峽底黝雲を噴き。洞洞漫漫。杳として其極を知らず。人をして雲梯を降るの思あらしめ。神恠れ魄動き。緘黙語る能はず。而して導者は則ち鞍に凭り。晏如として騎し。悠揚迫らず。隻手を以て左右の奇巒怪岬を指し。備さに勝概を説く。余等は惴惴焉として馬の失脚せんことを慮り。審聽する能はず。顧盼する能はず。降ること千五百呎。徑較夷と爲り。神始めて定る。崖下疎林あり。廬舎あり。廬舎をインディアアンキャンプと曰ふ。時に日既に天に中し。普く峽中を照らし。丹楮の崖と。互に暉映赫灼し。兩眼之か爲めに暈せんとす。謂はゆる日中夜半に非されは日月を見ざる者。眞

に此峽の謂なり。

降ること又一哩。徑復險と爲り。馬を下り。繩を引き以て下る。初め過きし時。視て以て孤巖片嶂と爲せし者。少頃にして之を回瞻す。れは。奇峰岌業として。天半に突兀たり。

十一時三十分峽底に達し。コロラド川の涓に憩ふ。是に至り刻を。經ること三時間。崖を下ること十哩とす。

川濶さ凡二百四五十呎。濁流黄褐。渾渾として至り。瀾瀾として鳴り。迂回迤邐。峽を縫ひ。壑を衝きて逝る。身を反らし。頭を擡げ。以て。兩岸を瞻れば。高きこと碧落に達し。滿目丹赭。寸青尺緑の眸を障るなし。乃ち川に臨み。石に踞して。行廚を傳ふ。水聲咽ふ。か如く恨む。か如く。生物の未到を愬ふる。か如く。恍惚として。魔窟に入り。鬼谷に坐するの想あり。



峽底



に此峽の謂なり。

降ること又一哩。徑復險と爲り。馬を下り繩を引き以て下る。初め過きし時。視て以て孤巖片嶂と爲せし者。少頃にして之を回瞻す

れは。奇峰岌業として。天半に突兀たり。

十一時三十分峽底に達し。コロラド川の溜に憩ふ。是に至り刻を

経ること三時間。崖を下ること十哩とす。

川濶さ凡二百四五十呎。濁流黄褐。渾渾として至り。濺濺として鳴り迂回迤邐。峽を縫ひ壑を衝きて逝る。身を反らし頭を擡げ。以て兩岸を瞻れば。高きこと碧落に達し。滿目丹赭。寸青尺緑の眸を障るなし。乃ち川に臨み石に踞して行廚を傳ふ。水聲咽ふか如く恨むか如く。生物の未到を愬ふるか如く。恍惚として魔窟に入り鬼谷に坐するの想あり。



峽底

响午歸路に即く。一登一憩。一躋一喘。三時三十分旅館に達す。夫れグラランド、カニョンの奇絶壯絶なるは。崖上に立ち。矚して之を得へし。然れども其神絶怪絶なるに至りては。親しく峽底に到るに非ずんは。得て之を闕ふ能はず。則ち此探險の如きは。余に在りては。洵に空前の壯遊と爲す。

時に汽車發軔の期未だ到らず。乃ち單身崖に沿ひ。進むこと二哩。ホビ、ポイントに抵り。地殻坼裂甚しき處を俯瞰す。之をエルトヴアの瞻る所に比すれば。更に大觀とす。其の岬嶽突出數千仞の深峽に臨む處に。本峽探究の鼻祖ホーエル少佐の碑あり。地勢尤奇壯。脚跟戰慄。久しく佇立す可らず。六時三十分發軔して西す。是夜夢魂依稀として。岬嶽巉巖奇壯神怪の間を徬徨す。

加州沃土 (其二)

二〇八

十六日晴。黎明。汽車カリフォルニア州に入り。コロラド川の下流を過ぐ。コロラドも此に至りて。河身濶を加へ。漸く浩汗森漫たり。此地グラランド、カニオンを距る三百哩。流水悠悠として。昔日歴し所の幽峽魔谷を語るに似たり。

ニードルス市を過ぐれば。其地高燥。一望平沙漠漠たり。在昔アングロサクソンの壯漢。慄悍剛武。此に遠征し。天垠地角。其到る所を極め。遂に西のかた太平洋に達し。廣袤數千方哩の地を拓き。以て殖民の業を創む。雄略壯圖。洵に嘆嗟すべし。

既にしてバルストウを歴て。午後四時サン、ベルナルディノ驛に抵る。此間始めて田圃の墾け。土壤の開けしを見る。サン、ベルナルディノは。加州平原肇頭の大邑とす。我大山領事卯次、ロス、アンジ

エルス市よりして至り。台安を候ふ。又此地居住の邦人子女を携へ。羣を爲して來り。列車に即き。台安を候ふ。祖國を思慕し。宗室を崇敬す。忠愛の情人をして惻惻焉たらしむ。

六時三十分ロス、アンジェルズ市に詣る。ロス、アンジェルズは。南加州の通都大邑にして。頗る熱鬧殷賑とす。

汽車此を過ぎ。詰旦將にデルモンントに赴かんとす。然るに余は此地を中心とし。南加州の地勢を相し。情況を察せんと欲し。親王に三數日の暇を乞ひ。拜別して車を降る。偶、米村米太郎氏に値ふ。氏は老友河村檢事長益善の姪たり。乃ち導者と爲し。徑ちにホテル、アレキサンドリヤに造る。

晚餐後出て、散策す。本市は阡陌井井として。縦横棊畫し。行人車馬。絡繹織るか如し。其氣候は四季率ね清泰にして。溫清體に適し。

且近郊遠坳。風光佳麗なり。加ふるに  
輓近多く石油を産し。厖厖十年間に  
して。俄に繁阜富庶を致す。即ち一千  
九百年の人口は。劣かに十萬に過き  
さりしもの。後十年三十萬と爲り。目  
今實に六十有餘萬たり。而して之を  
商工殷賑の市と稱するよりは。寧ろ  
富家翁の住居市と爲すを可とす。  
市の一隅に。我邦人聚居の巷衢あり。  
適きて之を睹れば。比屋皆木材を用  
ひ。湫隘殊に甚し。大半雜貨舖飲食店  
に係り。而して一に流寓の邦人を花



頭 街 市 ス ル エ ジ ャ ス ロ

客とす。萬里の波濤を衝きて。異域に來り。而して邦人を花客とし。  
以て店を營み利を規る。昔人云ふ。獸相食むと。是れ豈同胞相食む  
に非ずや。然りと雖も此に來る者。其初め多くは財本を有せず。大  
厦高閣を築き。奇貨を居き。歐賓米客を速き。以て折衝する能はさ  
るは。蓋し勢の然らしむる所。其れ亦已むを得ざるに出る歟。

十七日晴。午前九時五分發軔し。サンタフェ鐵道に頼り。海に沿ひて南下す。赴きてサンディアゴの海軍要港を觀んか爲めなり。發するに前たち。サンディアゴの邦人近藤某に電報して。嚮導たらんことを屬す。近藤氏は曩日偶、汽船伏見丸に同乗せし者。頗るサンディアゴに興望ありと云ふ。米村氏亦同乗す。行行窓外を目すれば。四郊平衍。種果の園圃相連り。又處所に石油を採掘するを見る。サンタアナ以南。鐵路海岸に沿ひ。景物清麗にして。風光佳なり。

午後一時十分。サンディアゴ停車場に達す。近藤孺人其夫に代りて來り迎へて云ふ。近藤は目下羈旅中に屬すと。乃ち孺人及其同伴江藤某を導者とし。自動車に乘し。街巷を過く。路人皆白布を口

に纏ふ。纏はさる者は贖金を課せらると云ふ。時疫流行するを以てなり。

進みて埠頭に抵り。車を汽艇に載すれば。汽艇即ち航して對岸コロナド半島に渡る。灣は周環紆鬱し。形勢甚た良し。然れとも水淺くして大船巨舶を容るゝ能はず。故に米國は此を以て潜水艇の根據と爲すの計畫を定めたり。

半島は西方一帶。太平洋に面し。風光殊に明媚なり。ホテル、コロナドあり。海濱に立つ。崔嵬高峻。設備完整し。氣候亦暄和なり。故を以て毎歲一月より三月に訖ひ。來遊者甚た多しと云ふ。乃ちホテルに投し。主管某に接伴員ロバートソン少將の書柬を致す。則ち優遇甚た至り。更に份して西方ノース島の飛行練習場を觀せしむ。赴くに迫ひて。年少の將校。迎へて前導す。

場は海陸兩軍飛行將校陶育の所にして。滄海四周し。平陸敞豁。四季を通して風雨少く。飛行練習を爲すに於て。絶佳の域とす。格納庫十數宇。飛行機數百臺あり。將校云ふ。別に新穎の器材を備へ。以て飛行射撃を練習せしむと。將に此に導かんとす。時既に晚し。乃ち謝して出て。舟してサンディアゴに返り。自動車を駛せて。街巷を觀る。此地千九百十五年博覽會を開きし所。往きて其故墟を觀る。當日の館宇。今悉く海軍の兵營たり。

晚餐に復舟してホテル、コロナドに到り。近藤孺人及江藤氏を招く。是夜深更サンディアゴを發し。ロスアンジェルスに返る。

### 加州沃土(其三)

十八日。午前七時ロスアンジェルス市に達し。旅館に投し朝餐す。十一時大山領事、貴布根外務書記生吉康來訪す。其導く所と爲り。自動車を驚せ。郊圻を巡る。

到る處熱帶樹扶疏として枝を垂れ。紛披離奇として。濃綠濯濯たり。中に第宅あり。別墅あり。皆意匠を竭し。雅致を極め。一見人をして清羨せしむ。謂はゆる富家翁の有に係れり。而して陽光透り。空氣澄み。車を驅りて此を過ぐれば。宛然一幅田園名畫中の人と爲る。

午後又二子の導く所と爲り。前世紀巨象の骸骨を觀んと欲し。博物館に如く。偶水曜午後閉鎖の日に屬し。入る能はず。轉してサンヘドロ港に赴く。

サンベドロは市を距ること二十五哩にして太平洋に瀕す。アスファルトの大途直走。其幅五六十呎。坦坦として砥の如し。而して一路車輪の磨する所と爲り。黯黒にして光澤あり。疾駛殊に爽快なり。米人の拓地開土するや。先づ意を道路を作り阡陌を開くに用ひ。動もすれば輒ち數千萬金を投し。毫も吝む色なく。以て永遠悠久の計を爲す。規圖雄大羨むべし。

車中大山領事我殖民狀況を説く。云ふ目下邦人南加州に住する者。通計三萬五千人。女子の來り嫁する者。每一月平均百人。而して其兒を生む。毎一年平均百三十人。生兒年年増率二十五人。又邦人所有の漁船三百五十艘ありと。沿路到る處に蔬圃あり。率ね本邦移民の有に係る。聞く邦人の蔬圃に就役する者。亡慮一萬五千。而して産蔬什の八は。我移民の出す所たりと。亦一快事とす。

既にしてサンベドロに達す。サンベドロはロス、アンジェルス、の門戸港とす。埠頭の邱阜に要塞あり。其下に長隄あり。縈環海を擁すること三哩。以て灣を爲す。米國は初め本港を以て海軍の要港と爲さんと欲せしか如きも。嗣後時勢の推遷に鑑み。之を商港に並用し得る者とせりと云ふ。軍興るに及ひ。造船業を本港比隣のウナルミングトン村に創む。其附近の地。今や居然として亦市街を爲す。

要塞下の邱阜に躋り。小憩して風光を眺矚し。尋て海に沿ひて東し。ロングビーチに抵る。

ロングビーチは。夏時海水浴場を設くる所。白沙平鋪し。粗。我湘南海濱に似たり。海濱に各種の設備を爲し。以て游客の爲めに謀り。宏壯の旅館は。比檐して海に臨む。晡時疾駛して。ロス、アンジェル

スの旅館に還る。夜大山領事の寓に於て邦風の晚餐を享せらる。平田外務書記生亦來り會す。平田氏は親しく露國革命以降の事を目せり。乃ち備さに悲惨の状況を説き。且云ふ。今や露國民人も漸くレニシ一派の過激主義に慊焉せり。蓋し過激主義は禍害の及ぶ所。國家瓦解し。蒼生魚爛し。舉國をして宛然冥府の狀を呈せしむと。顧ふに露國の時態を揚暴し。以て輿衆に示すは。此種過激の時態を防くに於て。蓋し亦毒を以て毒を攻むるの一手段と爲すべき歟。

#### 加州沃土(其四)

十九日晴。午前十一時三十分。大山領事平田書記生と偕に自動車を馳せて。再ひ博物館に造り。巨象の骸骨を観る。其高一丈五尺許。頸より臀に至る二丈許。牙長一丈二尺許。人をして其存活の時。魁碩雄壯。通體柔毛毳毳たるの狀貌を想見せしむ。博物學者の説に據るに。凡十萬年前に生息せし者に係ると。附近のアスファルト油田中より發掘せし者と云ふ。

午後赴きて活動寫真劇撮影會社を観る。活動寫真劇撮影は。頗る此地に行はる。蓋し此地風光妍媚。景物清麗にして。空氣乾燥し。寫眞の撮影に適し。且都邑に邇きを以て。百端の器材を得るに便なれはなり。故に活動寫真撮影を業とする者多く住し。各國活動寫眞の用畫。其十の八九は。此地の製に係ると云ふ。



會社の撮影場は、其演劇の所、單に前半面を飾り、俳優此に登り、音樂に和して技を演し、強力の電氣を用ひ、以て之を撮影す。而して一齣を撮影せんと欲せば、脚本に据りて反覆試演し、優長親ら之を指揮す。技熟するに及ひて、始めて撮影す。故に一閱の描摸を得る。既に多時を要す。夫のフィルム數千尺の畫劇を得る如きは、其容易ならざること知るべきなり。

本市を距ること東北十哩許、バサデナ邑あり。米國大賈巨商等に於て、別墅を此に有せざるは無く。バサデナの寸壤尺土にして、米國富豪の第宅に屬せざるは無し。蓋し此地爽塏、風光人に可にして、尤攝養に適す。故に近年猝かに世の知る所と爲る。

日斜なるに迫ひて、自動車を驚せて往觀す。橋あり。バサデナ橋と稱す。此を過ぐれば、則ちバサデナの仙臺なり。ヘバーの喬木は、鬱

葱として、坦途を夾みて蟬聯し、細草芊緜、甍を展ふるか如く。珍樹奇草、蔭を成し叢を爲し、其間高第低宅、隱見顯滅し、清淑幽閑、雙ひ該り兼ね具り。宛然一大公園の如し。而して第宅外は、洞乎として、牆壁無く、路人は第宅を以て公園を粉飾すると爲し、第宅は路人を以て家人と爲すか如し。而して第宅路に沿ひて連接すること、幾んど二哩餘。夫れ氣佳にして、而して宅の清雅なる、之を東西各地に索むるに、是の如き所は、蓋し多く獲難しとす。

日暮ロス、アンジェルズに返り、八時單身發軔北上し、將にデルモンテに赴き、親王に追從せんとす。車内に山本某あり、年壯にして海外に移住し、農を業とし、遂に成功せし者、車窓娓娓として、其一作一動備さに酸辛を嘗めしを説く。蓋し亦有爲の一丈夫なり。

二十日、雨。後霽。午前七時サリナス驛に抵り、デルモンテ支線に轉

す。八時デルモンテに達す。時に細雨瀟瀟樹を濡し。点滴聲あり。馬車に乗して。ホテル、デルモンテに到り。親王に候す。ホテルは。徒に設備完好なるのみならず。游泳場あり。郊球場あり。漁せんと欲せは海近く。車せんと欲せは路坦に。長汀曲浦。联接綿亘し。亦加州沿海の一勝區なり。デルモンテは。モントレイ半島頸部の邱上にあり。半島は迂回縈環して。モントレイ灣を擁す。岸に沿ひ自動車<sup>モーター</sup>を驅り。一周して風光を觀る。其間十七哩とす。土俗之を稱して十七哩の駛車<sup>モーター</sup>と曰ふ。余も亦之を試む。車の歷る所。行孤松の懸崖に挂り。銀濤の翠巖に碎くるを見る。其風光髣髴として我土佐畫の趣あり。歐米人に在りては。蓋し稀觀の景致とせん。斜陽面を照すに迫ひて。ホテルに返る。

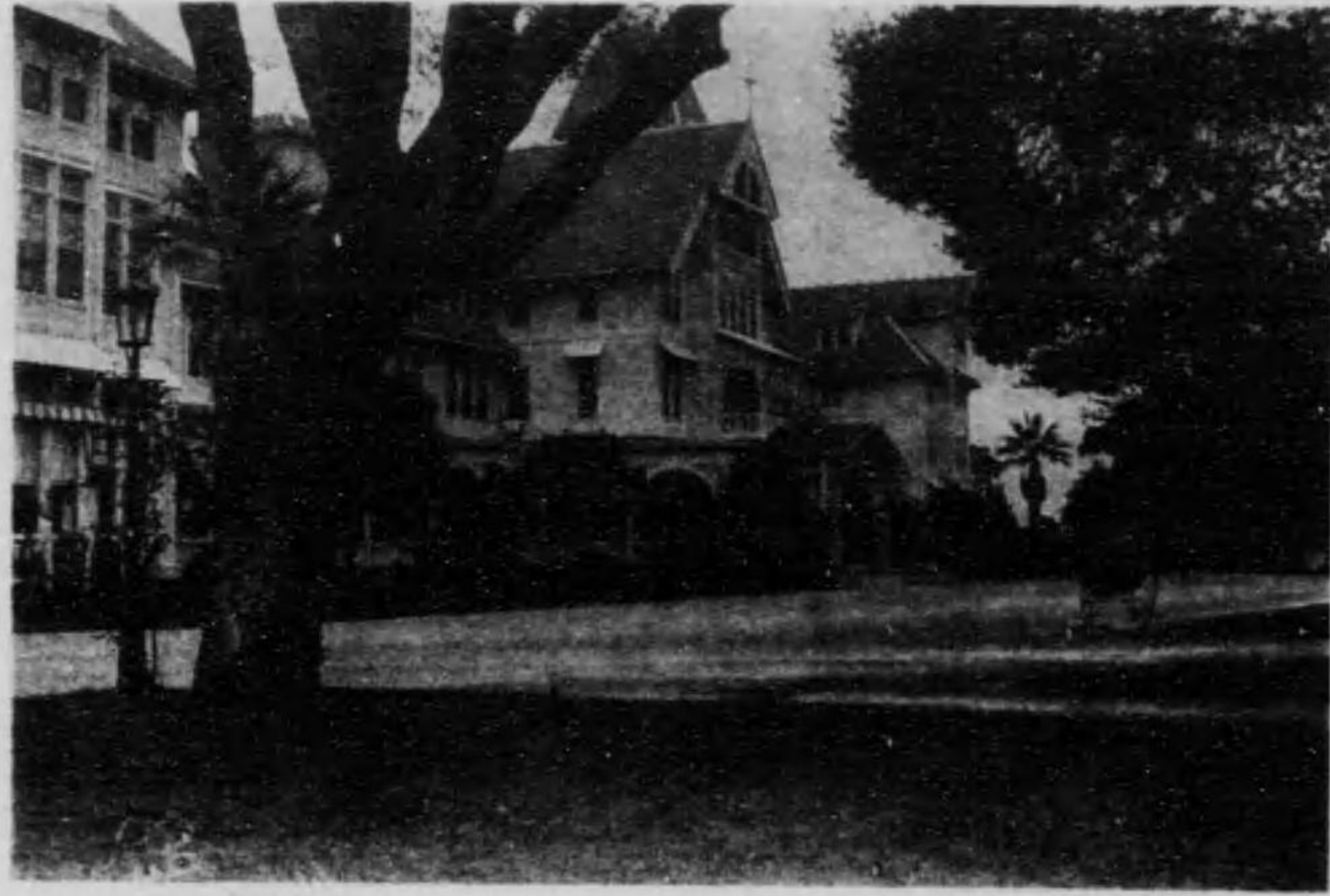
ホテル、デルモンテ



老松危巖



す。八時デルモンテに達す。時に細雨瀟瀟樹を濡し。点滴聲あり。馬車に乗して。ホテル、デルモンテに到り。親王に候す。  
ホテルは。徒に設備完好なるのみならず。游泳場あり。郊球場あり。漁せんと欲せば海近く。車せんと欲せば路坦に。長汀曲浦。聯接綿亘し。亦加州沿海の一勝區なり。  
デルモンテは。モントレイ半島頸部の邱上にあり。半島は迂回縈環して。モントレイ灣を擁す。岸に沿ひ自動車を驅り。一周して風光を觀る。其間十七哩とす。土俗之を稱して十七哩の駛車セブンティマイルス・ドライブと曰ふ。余も亦之を試む。車の歷る所。行行孤松の懸崖に挂り。銀濤の翠巖に碎くるを見る。其風光髣髴として。我土佐畫の趣あり。歐米人に在りては。蓋し稀觀の景致とせん。斜陽面を照すに迫ひて。ホテルに返る。



ホテル、デルモンテ



老松危巖

親王晩に接伴員海軍少將ロバートソン、陸軍少將ハインズ、探偵長オコネル以下を召し。晩餐を賜ふ。ホテル前は停車驛たり。餐後乃ち汽車に就く。

二十一日。未明發軔す。葦を離るゝに比ひて。朝曦平原に輝き。將に桑港に近つかんとす。午前十一時桑港に到る。日米兩國人の來り候する者多し。直ちに埠頭に踵り。我汽船西伯利亞丸に搭す。

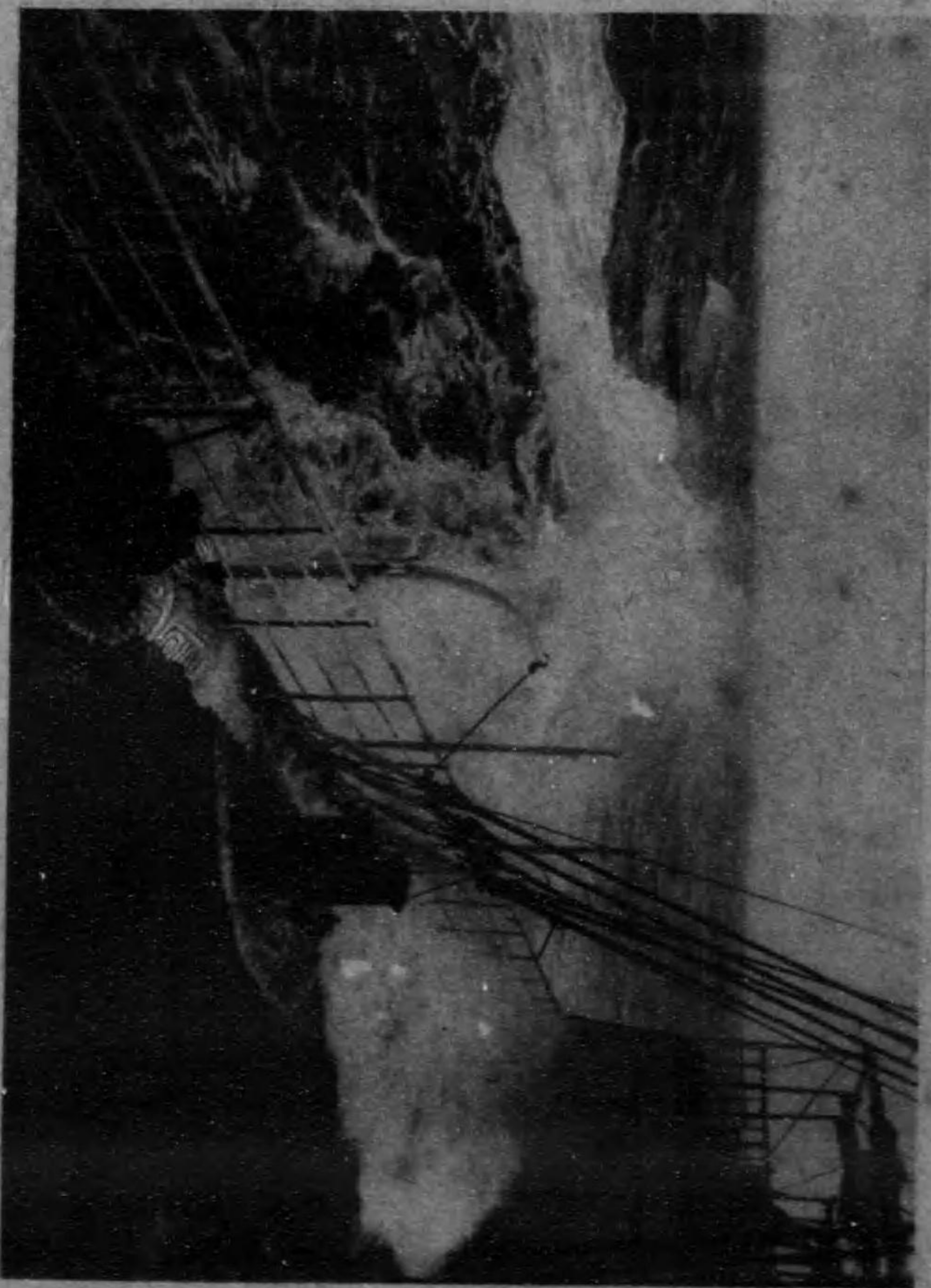
桑 港 解 纜

汽船西伯利亞丸は。載量二萬餘噸たり。午後一時解纜す。埠頭を回盼すれば。凝立して手巾を舉げ帽を振り奉送する者頗る多し。既にして船首一轉し。徐ろに灣口に向ふ。

此行前後一百日。周游二萬有餘哩。是日始めて邦船に乘し。故苑に向ふ。中懷特に欣欣焉たり。日春くに比ひ。金門海峡の驚瀾狂濤を航過し。太平洋に浮ふ。晚餐に親王に陪し。邦様の膳に對し。殊に思郷の



桑 港 拔 錨



狂瀾に擡ぐ

情を生ず。

是日浪高く船揺撼甚し。爲めに食卓に列せさりし者多し。

二十三日。天候較穩に。船の揺撼較減す。是夜十時。汽船天洋丸に昏黒の滄洋に値ふ。牧野特命全權大使顯伸等平和會議參列員之に搭す。乃ち互に無線電信を以て。水路の平安を祝し。且烟花を揚げ。汽笛を鳴らし。以て相問安す。

二十四日夜。西俗の謂はゆるクリスマス、イーブたり。歐米の男女船客。通宵甲板に舞踏し。頗る嘈雜たり。二十五日。クリスト降誕の辰たり。食堂を盛飾し。以て祝節を表す。夜親王に陪し。クリスマス晩餐の宴に列す。盡日風徐に波靜に。樂易として航海す。二十六日。航海猶ほ前日の如く恬安なり。

布哇寄港

三三六

二十七日。船布哇ホノル、港に近づく。穹天晴朗藍の如く。而して  
煥暑漸く増し。船員皆夏服を服す。檢疫既に畢り。進みて埠頭に入  
る。我軍艦淺間。高く旭旗を揚げ。西側の埠頭に横泊す。而して水兵  
白衣を着け。出て、甲板に堵列し。登舷の禮を爲し。以て親王を奉  
迎す。遐に觀れば。其狀榮として編貝の如し。

親王上陸したまふ。諸井布哇總領事<sup>六</sup>、古川淺間艦長弘以下奉迎  
者多し。乃ち自動車に乗して。我領事館に造る。邦人子弟奉迎する  
者數十名。華妙鮮麗の花卉を上る。此輩皆中學校生徒及女學校生  
徒の簡拔せられしものとす。

小憩の後。適きてヌアヌバリの勝境を探り。又轉して水族館を觀  
る。ヌアヌバリは。オワフ島中央分水嶺の巔に在り。眺矚開廓して。

腹背海に面し。景致極めて秀麗雄俊なり。水族館は多く近海の魚  
鱗介を養ひ。珍を採り奇を集む。金鱗朱介。或は浮泛し。或は蠕動  
し。頗る人目を悦はしむ。共に余往年一遊の地とす。

午後親王赴きて邦人の甘蔗栽培場を台覽したまふ。余二三子と  
俱にホノル、市を散歩して。書籍土宜を購ひ。轉して軍艦淺間を  
觀る。淺間は此に停泊し。以て太平洋警衛に任す。既にして歸船す。  
台駕將に布哇を去らんとす。來りて奉送する者多し。

錦帆歸朝

三三八

是日午後五時。西伯利亞丸はホノル、港を抜描す。西航三日を踰え。三十日夜分に至り。船西半球より東半球に入る。爲めに一曆日を失ひ。三十一日を歴すして。徑ちに大正八年一月一日に移る。出日杲杲として。半規を滄海混濛中に現し。元旦の初旭は。先つ我西伯利亞丸を照射す。時に船我皇國を距ること二千五百海里。邦人の迎正に前たつこと。實に三時間とす。

午前九時。軍装して親王に拜賀し。椒酒を斟みて。新年を祝す。午後船客中外を問はず。一齊に甲板に出て。運動會を開き。欣欣愉愉として皆歡を罄し。笑聲船に滿つ。

三日を歴て。四日に至り。余時疫に罹りて臥褥す。小栗中將も亦同病。隣室に臥す。荏苒七日に訖り。船將に横濱埠頭に入らんとし。而

して余等の微恙も亦快癒す。然れとも他に感觸せんことを慮り。謝して扈從の班を免る。

是日快晴。天碧にして海紺に。乾坤一體たり。東京灣を過ぎて。横濱港外に進めは。富嶽の皓雪は。紅旭の彩とる所と爲り。芙蓉の半開くか如く。白玉の天に懸るか如く。遙に親王を迎へて奉祝するに似たり。而して歐米人の始めて我國に來る者。皆甲板に上り。欄干に倚り。嘖嘖として風光の佳麗。富嶽の秀逸清遠なるを稱す。

既にして軍艦生駒驅逐艦四隻を率ゐて來り。親王を奉迎し。飛行機亦高く鯨音を發し。船上に蹠躑して圈を描く。

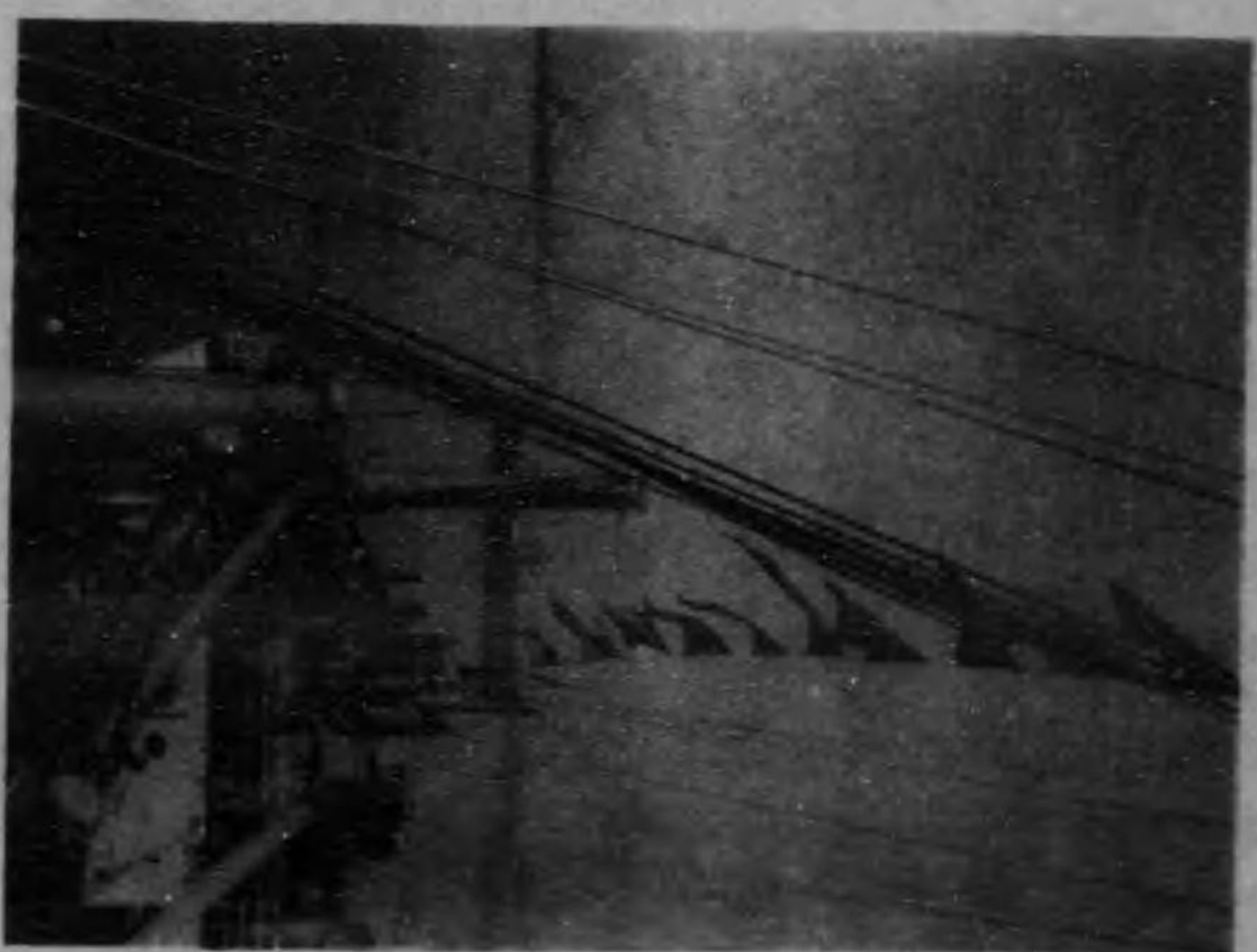
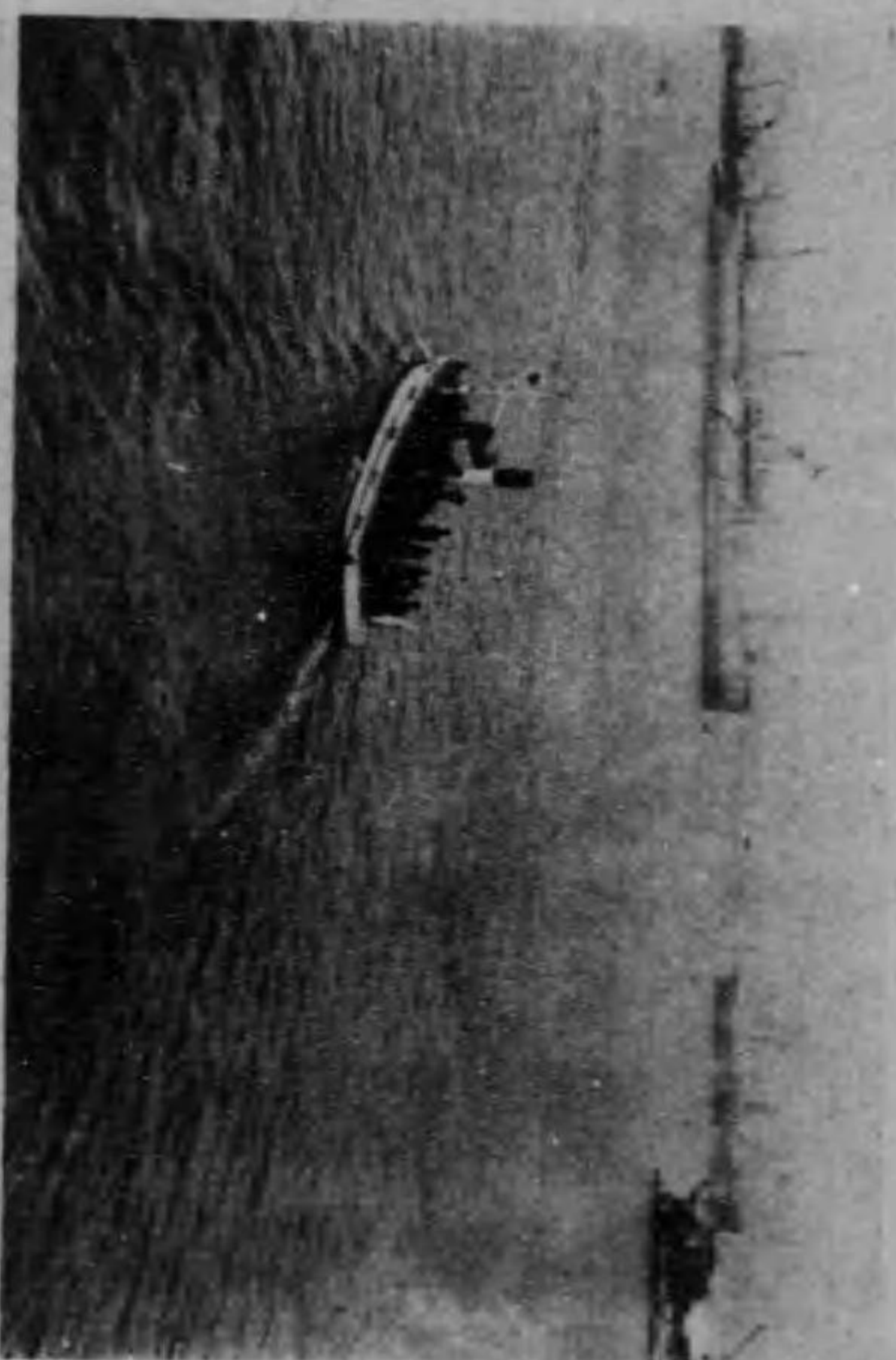
午前十時。船横濱防波堤外に投錨す。是に於て親王汽艇に遷り。上陸したまふ。余は舷上奉送し。台影遼遙なるに及ひ。然る後來迎の家人と偕に船中に午餐し。午後二時入京。本郷第に歸る。



越えて一月十三日親王及隨員勅を奉して入朝。天顔を拜し。午後一時親王以下豐明殿に於て。英佛伊米白の大公使と同しく午餐の御宴に陪す。宴の方に開くや。樂翁如として作り。釋如として成り。其音高雅。其聲正大。眞に是れ天上の仙樂にして。復異域王庭の比に非ざるなり。恩眷優渥。至らざる所無く。而して此に至りて親王克く其大任を終始したまへりと云ふ。

回思するに余叨りに寵任に膺り。親王に扈從して。セントジエムス王宮に使し。盛典鴻儀に列し。嘉宴禮饗に陪し。英國朝野の款待を被りて。日英國交の深厚堅密なるに感あり。尋いて佛白伊米を歴訪して。國王元首に謁し。俊材傑士に接し。宮廷に登り。政廳を過き。軍衛工場に踵り。艦隊を訪問し。戰場を巡檢し。遭逢し易からざるの境を歴て。遭逢し易からざるの事を觀る。寔に榮幸と謂ふへ

殿下御上陸



錦帆故港を飾る

し。蓋し歐米列國台駕を迎へ。至誠を表し。禮待至らざる無く。以て我皇室を尊崇し。我帝國を敬重するの状を親て。私心快暢に禁へず。窃に謂ふ。是れ一に輓近我國力充實恢張せし。の反響餘暉たらすんは非すと。

欽みて惟ふに。先帝宏謨維新の大業を建てたまひしより以降。茲に五十年。元勳碩輔及民間達識の士か。匪躬軼掌。辛苦經營せしもの。餘慶此に至り。大に發せるものと謂ふへし。余の台駕に従ひ歐洲に在るや。時偶大戦終熄の期に屬し。和戦交替の際に遭ふ。乃ち出ては戦場に戎馬の猶ほ恣憊たるを目し。入りては。都市に士女の戦捷を賀するを睹る。昨は舉國苦辛争戦の務に服し。今は上下鳩首戦後の事を議す。一推一遷。物情騷然。兎起鵲落。殆んと應接に暇あらず。

余往年戰亂の勃發に獨逸に逢ひ。嗣後征に英軍に従ひ。今又戰爭の終熄に佛蘭西に會し。輒近爭戰攻守進止の狀況より。以て背後國民義勇奉公の情景に至るまで。親しく之を目撃し。以て歐米列強か大戰の鉗鎚に鍛冶せられて。萬般の施設事業。其機能を促進し。其面目を一新せざるなきを詳にす。

夫れ戰爭は。國家の興廢民族の存亡に關する所。故に一たひ禍亂を歴れば。民心興起。風俗移易し。浮華變して質實と爲り。虛夸變して眞摯と爲る。宜なる哉。既往五年の禍亂は。交戦列強の文物武備をして。急進速歩せしめ。其勢治平數十年に優る者あるや。而して由來自由を尊崇し。個人を主張するの歐米民衆か。國家の危急に當り。振作激勵。勇往直前。難に遇ひ厄に際する毎に。却て智能を啓發し。強忍持久。竟に克く長期作戰を遂行したるは。豈亦驚くへく

畏るへきに非ずや。

之を戰鬪諸機關具備進歩の狀に徴するに。陸に於ては。巨砲、戰車、飛行機、毒瓦斯の創作の如きあり。海に於ては。潜水艇の跳梁に伴ひ。水雷、護網、迷彩及船團護送の發達の如きあり。更に背後國內の情況を觀るに。上下一致。同心戮力し。國王元首。範を垂れ型を示す有り。朝紳宮媛。市井男女。工場に病院に。農圃に鑛坑に。義勇奉公の誠を致す有り。其功績の偉且卓なること。洵に千古の偉觀とす。抑。有史以降。未有の本大戰は。普く寰宇獨立の國家に警告して。將來舉國作戰の準備を促かし。自給自足の切要を知らしむ。列強の趨勢。是より將に國力の培養。兵備の完整。原料の蓄積。商工諸業の發展を以て。其國策と爲し。以て滿腔の精力を此に傾注すへく。異日彼我頡頏力爭の狀。今より以て豫めトすへし。且夫れ方今新異

の思想漸く瀰漫し。貧富の軋轢日に甚しきを加ふるの勢あり。是の時に當り。外列國と對し。内結束を鞏うし。以て益。國運を恢張せんとす。國家の前途亦多事と謂ふへし。

嗚呼吾人幸に 皇室の稜威と。前賢の遺烈とに頼り。昭代の樂を享け。而して國光四方に耀き。世界列強と駢肩す。斯の國勢をして益。隆昌ならしめ。斯の民福をして益。増進せしめ。以て後世子孫をして長へに餘光を承けしむる者。是れ豈吾人の責務に非ずや。仰いて聖恩の涯りなきに感激し。俯して責務の重大なるを思念し。而して宇内大勢の趨く所を揣摩して。皇國焦眉の急に想ひ到り。百感四集。筆を闇き頭を擡けて慨然たること之を久うす。

## 皇華隨班錄

11  
303

大正八年十二月十一日印刷  
大正八年十二月十二日  
發行著者東京市本郷區本富士町二番地前田利爲  
發行所東京市本郷區本富士町二番地高木亥三郎印  
刷者東京市神田區美土代町二丁目一番地鳥連太郎  
印刷所東京市神田區美土代町二丁目一番地三秀會

終